

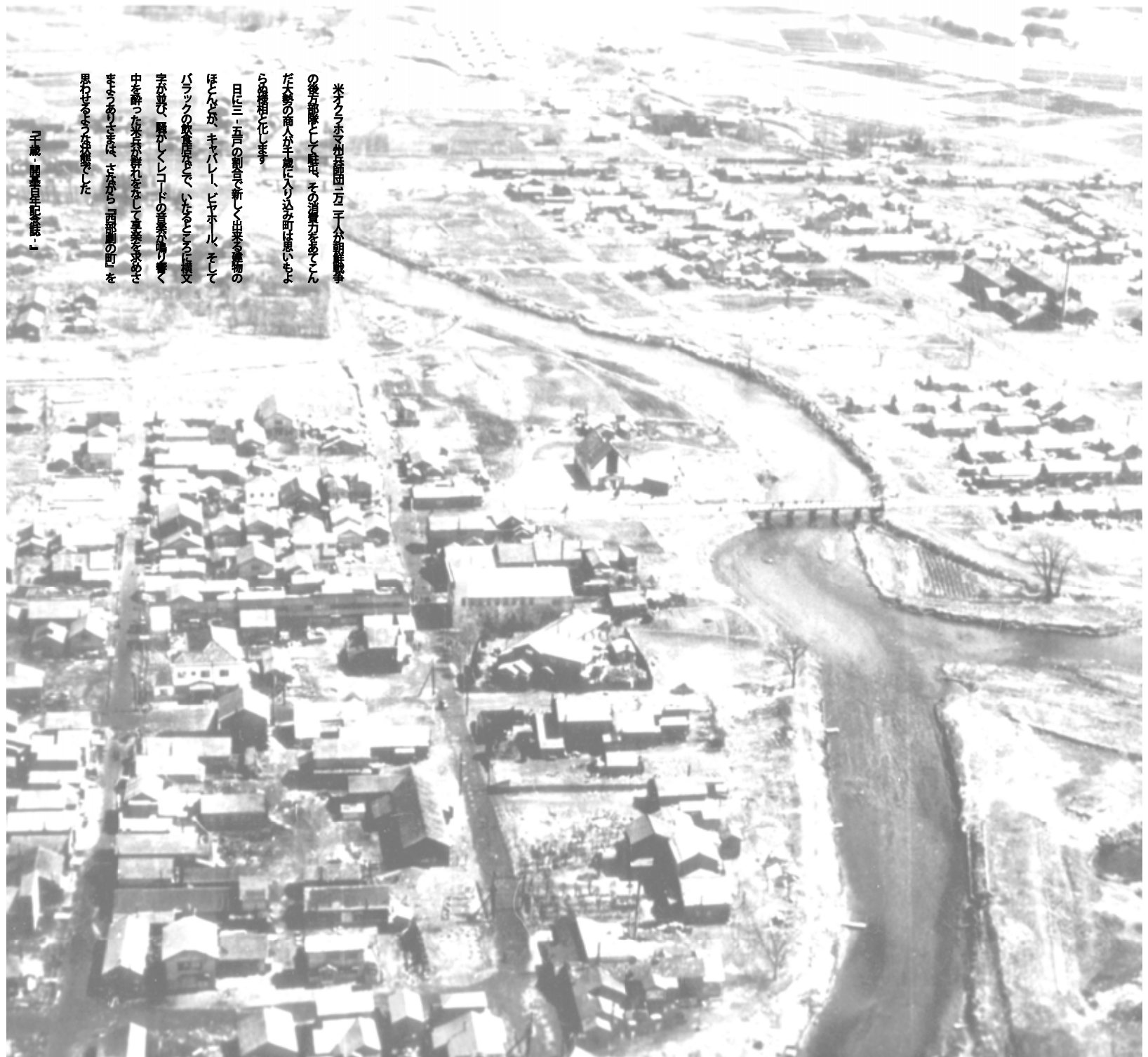
『新千歳市史』編さんだより

志古津

過去からのメッセージ

Message From the past

HOKKAIDO
CHITOSE-CITY



米アラスカ州兵備団二万三千人が朝鮮戦争
の後方隊として駐屯。その雄力をあてこ
だした勢の南千歳に入り込み町は居ても
よからずでしよ。

田川三吉の遺言は新千歳米田米穀の
隆盛が、キャバレー、ピザホール、そと
にマンの飲食店を建て、そのまわりの雑居又
去は洋風、暖かしく、ロードの音楽が鳴り響く
中を酔った客は群れをなして事業を求め、こ
そをゆめゆめは、さながら、副都心の町を
思わせるような気配でした。

千歳・副都心はこれだ



第3号 平成18年3月



恵まれない子供達と米兵によるクリスマスパーティ (S28. 12. 24)



官舎や兵舎ができるまで、多くの家庭の軍人を長期滞在させた (S14. 新保旅館前: 新保隆子氏蔵)

志古津 3号

目次

「占領と朝鮮戦争に翻弄された地方都市

・北海道千歳町」……………大谷敏二 ……1

「千歳の歴史的建築物調査

・商家住宅と海軍官舎の事例」

…小田賢一・北海道建築士千歳支部 ……20

あとがき

占領と朝鮮戦争に翻弄された地方都市

—北海道千歳町—

大谷 敏 三

千歳市総務部主幹

(市史編さん担当)

Key Word 終戦 占領 進駐軍 教育 売春婦

特殊貸間業認証に関する特別措置条例

一・終戦と戦後処理

(一) 占領

昭和二十年八月十四日、日本はポツダム宣言を受諾した。

八月二十八日に連合国軍米陸軍第八軍(以後米第八軍と略す)先遣隊が湘南海岸に上陸、以降厚木、横須賀などに続々と進駐を開始する。東日本の占領を担当した米第八軍は九月までに担当地区へ進駐を終了する(北海道は十月)。

西日本の占領にあたった米第六軍は九月二十二日から二十五日にかけて佐世保、長崎、和歌山、名古屋に第一陣を上陸させ、おおむね十一月月上旬までに各地への分散・展開を終えた。四十三万人の連合国軍が全都道府県に進駐したのである(註・一)。

アメリカの対日占領政策の基本枠組みは昭和二十年九月に公表された「降伏後における米軍の初期対日方針」と、十一月に統合参謀本部からマッカーサーに指令された「日本占領及び管理のための連合国最高司令官に対する初期の基本指令」に示されている。

「初期対日方針」では、海外領土の剥奪^{はくだ}、武装解除、軍国主義の掃蕩、民主化、平和的国際社会への日本の復帰、軍政下での日本の行政機関の利用、産業の非軍事化、労働・工業・農業分野における民主的組織の助長、日本の経済制度の所有・管理・支配のより広範な分配などを規定していた。ポツダム宣言に日本の間接占領方式が明示され、最高司令官が天皇および日本政府をつうじて権限を行使するとの規定が明示された(註・二)。こうして日本はポツダム宣言の受諾によって戦後のあり方を決めたのである。

ポツダム宣言の第十項には「日本国民のうちに民主的傾向が復活・強化される」とあり、この「復活」の一語は戦前の日本において自前の民主主義を築いていたことの認知を意味していた。

戦後アメリカの対日対策は、軍事主義的日本人を処罰し、将来日本で軍国主義が再現するのを阻止するためには、日本の政治経済、社会の改革が必要であるとするものであった。

二十一年にアメリカが発表した「日本の武装解除と非軍事化に関する四国条約案」は、米英中ソの四国が、二十五年間にわたって日本の武装解除と非軍事化のために措置をとるという厳しいものであった。しかし、連合国の間では、対日講和に関する意見が一致しなかった。

(二) 終戦時の千歳

千歳海軍航空基地は無傷で八月十五日を迎えた。皮肉にもこの日、四発大攻「連山」のために建設された第二基地の滑走路「一五〇〇×八十」が完成を見ている。そして千歳にも慌しく占領軍が訪れる。八月十五日の翌日、第二基地連山滑走路に南太平洋方面から飛来したB・29重爆撃機が着陸する。北海道でB・29が離着陸できる飛行場は「連山」用に造成された千歳第二基地連山滑走路よりなかったのである。以後道内におけるB・29

用飛行場として使われた。

敗戦時、駐独陸軍武官だった大谷修が米国ベットフォードスプリングに軟禁されていたときの日記、九月二日の項に「B・二十九、三機北海道よりシカゴ迄六千マイルを一気に飛ぶ二十六時間」とある。日本時間で九月三日のことで、この連山滑走路から飛び立ったB・29は米本土シカゴまで無着陸で飛行した。この飛行は当時の無着陸の世界記録であった(註・三)。

九月九日に、千歳第二基地連山滑走路に神奈川県厚木基地から米陸軍第五航空軍(以後、米第五航空軍と略す)の高級将校二十名がB・29、二機で飛来し、海軍施設と飛行場施設を占領財産に指定した。北海道庁の早坂冬男内政部長が接触した。第一航空基地の滑走路の延長を指示した。

高級将校とは日本各地にじゅうたん爆撃をした第五航空軍の司令官のカーチス・ルメー少将とその幕僚達であった。

九月十日には、米第八軍サッター少佐ら十数人の米兵を乗せた米中型輸送機が飛来した。日本陸軍第五方面軍民間防衛涉外担当参謀福井正勝少佐(後に陸上自衛隊第七師団副師団長。退官後千歳日の出丘に在住)が接触した。

道内には美唄、赤平などの炭鉱や室蘭の港湾などに四百七十人位の連合軍米軍捕虜が抑留されていた。九月十二日、七十人の白人捕虜が飛行機で、あと四百人は汽車あるいは船で小樽から引き揚げた。

九月二十三日、米鉄道輸送部隊司令官ベッソン代将、千歳に飛来。飛来の目的は北都札幌から総司令部のある東京までを結ぶ進駐軍専用列車の運行と米軍進駐に伴う主要駅における列車運行取扱事務所(RTO)の開設にあった。十月四日には札幌駅にRTOが開設され、千歳も同時期に開設された。

(三) 連合軍北海道に進駐

極東米陸軍の主力は第八軍であった。第八軍司令官ウォルトン・H・ウォーカー中将は司令部を横浜に置いて、東北・北海道の第七十七師団、関東の第一騎兵師団、関西の第二十五師団、九州の第二十四師団の四個師団を直接指揮していた。

四個師団からなる第八軍は、五年の間、日本占領の任務についていたが、『米公刊史』によれば、充足率は七十割で、将校や下士官のなかには第二次世界大戦の歴戦者もいたが、兵の多くはうら若い十九〜二十歳の青年だった。当時の各師団は、占領軍であるということや、演習場が少なかった関係もあって、あまり訓練がされていなかった。

十月四日、米第八軍第九軍団第七十七師団の一部が函館に上陸したのに続き五日には小樽港から北海道占領主力部隊の上陸が始まった。一万六千人の人員と千台の車両が上陸し、上陸部隊は軍用トラック、装甲車両、そして列車で札幌に到着した。

第七十七師団は、「自由の女神」の隊章をつけ、フィリピンからグアム島、沖繩の激戦を経てきた。第九軍団司令官はライダー少将、第七十七師団長はグルース少将、副師団長はランドル代将であった。

一行の中心と思われる部隊が北海道拓殖銀行本店新館の入口に停ったのは午前十一時頃であった。第七十七師団長グルース少将の一行である。やや遅れてライダー少将らが札幌通信局へ入った。いずれも進駐軍用に接取され、受入れの準備は整っていた。大同生命ビル、グランドホテルなど水洗便所が設備されていた建物がつぎつぎに接取されていった。

一行の一部は小樽港に着くと、その足で千歳に入ってきた。進駐軍は、ジープ、大型トラックを連ね砂煙を上げながら、海軍航空基地千歳基地に入った。司令部は現在の航空自衛隊第二航空団200ビル内に設けられた(註・四)。

進駐当初の紳士ぶりが印象に残る。子供たちの目に映るGIたちは「親切で清潔・不思議なものを持つてい」た。

北海道進駐は東京、横浜のような事故はなく明朗におこなわれた。「なぜか？」一人の記者が訊ねた。彼らは答えた。「七十七師は歴戦の部隊だからさ。戦争の残虐さを経験してくると、われわれキリスト教民族はかえってヒューマニズムにみがかれるのだ。それに北海道は戦禍も少なく気持ちがなごむかも知れない」。またある米兵は「しかしね、実戦をやつたことのない部隊がくると、こうはいかぬかも知れない」。そしてこの言葉はあとで裏書きされた(奥田一九六一)。

進駐二週間後、早くも古参兵から本国へ復員し始め、本隊は二十一年二月に本国に帰還した。

(四) 千歳進駐

十月七日には、米第五航空軍のミリン大佐が千歳基地を接收しノースアメリカンP・51D型ムスタングを装備した戦闘機部隊が駐屯、千人が駐留した(高橋一九八二)。米兵は、地元の心配とは裏腹に非常に紳士的で何の不安も街に与えなかった。「キャンプに務めている町の娘との自由な交際」や「ヨコハマや佐世保から転勤を命じられた士官や下士官が、なじみの女をチトセの町につれてくる」ことはあったが「はじめはそれほど目にあまる状態ではなかった」(註・五)。

昭和二十一年四月には、第十一空挺師団七千人が進駐すると、人口は流入者によって増えていった。空挺部隊はノースカロライナ出身兵を主力とする落下傘部隊であり、師団長のスィング少将は実戦の経歴があったが、部隊は訓練中の兵が多かった。

進駐軍は二十一年春から真駒内の道立種畜場にキャンプ・クロフォード

の建設を始めた。この計画には千歳基地も含まれていた。真駒内一千歳間には米軍のシャトルバスが運行された。キャンプ・クロフォードには、兵二十名、下士官四名が入る一棟六十七坪の兵舎が三百三十棟を始め、食堂、将校家族の住宅、学校、グラウンド、PX、娯楽施設などが建設された。いずれも水洗便所付、スチーム暖房、給湯施設が完備されていた。

キャンプ・クロフォードは、昭和二十二年秋に完成する。兵舎、その他建坪六万坪、工費三十億を要し、米軍施設としては日本一だった。三十三年に返還されるまで北海道に駐留する米軍の中枢を担った。

千歳の空挺部隊は、昭和二十四年四月満三年で米本土へ撤退し、それに代わって米陸軍第七歩兵師団七千人が進駐した。第七歩兵師団は、朝鮮戦争の勃発により出動、留守部隊が残った。

(五) GHQの戦後改革と冷戦

昭和二十一〜二十二年は改革の季節であった。

民主主義の妨げになっていた政治的、社会的、経済的基盤再編成が行われ、天皇制、財閥、地主制から宗教、教育にいたる一連の民主化政策が非軍事化と不可分なものとして遂行された。

イギリスなどの連合国にとってアジアことに東南アジアにおける戦争は何よりも植民地奪還の戦争であった。日本の敗戦によりアジアは革命と独立の波におおわれた。国民党軍と、共産党軍との内戦が急速に決着し、二十四年十月毛沢東は北京で中華人民共和国の成立を宣言した。

戦後、新たな国際機関として国際連合が設立され、これにはアメリカも加盟した。まもなく、アメリカと戦争中は同盟関係にあったソ連との間に緊張感が生じた。ソ連の指導者ジョセフ・スターリンは、ヨーロッパで解放されたすべての国における自由選挙を約束していたにもかかわらず、ソ連は東欧に対し共産主義の独裁体制を押し付けた。

二十二年三月、モスクワでの米英仏ソ四大国外相会議以来決定的になった米ソ間の東西冷戦が、ヨーロッパを中心舞台の一つとした。

アメリカの対外政策が、対ソ強硬策に大きく転換する。三月にはトルーマン大統領が、「トルーマン・ドクトリン」、六月にはヨーロッパの復興を援国する「マーシャル・プラン」を発表し、大戦中の連合国の協調に亀裂が生じ、「封じ込め」の冷戦政策が始まる。マーシャルプランは、ヨーロッパにおけるアメリカの影響力を強化する結果になった。援助は途中から軍事的傾向を帯び、その後のNATO(北大西洋条約機構)成立への準備ともなった。

アメリカの対日政策は再検討がなされ、日本を反共戦略に結び付け冷戦の状況なかでソ連に対抗するための協力国として位置づけ、日本の経済的安定が国内からの共産化を防ぐという観点に立つものであった。

首相に返り咲いた吉田茂は「改革」を押し戻そうとする。

中国革命の直接的刺激をうけたのは、朝鮮の共産主義者であった。朝鮮は日本の敗北後、米ソにより分割占領され、昭和二十三年に南には反共の大韓民国が、北には朝鮮民主主義共和国が成立した。朝鮮半島は分断された。この二つの国家はそれぞれ自ら全朝鮮を領土とする唯一の正統国家と任じ、他方を傀儡政権と決めつけた。民族的課題である統一国家の実現は「領土完整」の課題とされ、武力統一しかないとの意識が南北双方に生まれていった。

ヨーロッパでは、ドイツは分裂国家となり、西側を英・仏・米が共同で、東側をソ連が占領した。二十三〜二十四年、ベルリン封鎖、東西領ドイツの分裂国家の誕生など東西陣営のイデオロギー的対立はヨーロッパ諸国に大きな影響を与えた。昭和二十三年春、ソ連は西ベルリンを封鎖し、町を孤立させ飢えさせることにより降伏させようとした。これにたいし西側勢力は、食料と燃料を大量に空輸し、結局、二十四年五月にソ連が閉鎖を

解いた。これより一ヶ月前、米国はベルギー、カナダ、デンマーク、フランス、アイスランド、イタリア、ルクセンブルク、オランダ、ノルウェー、ポルトガルならびにイギリスと同盟を結び、北大西洋条約機構(NATO)を結成した(和田一九八八)。

二. 朝鮮戦争と千歳

(一) 北朝鮮軍南進

昭和二十五年六月二十五日、ソ連製の武器で武装した北朝鮮軍が、スターリンの承認を得て三十八度線を越えて南進を開始した。ソ連製戦車二百五十八台を擁し、圧倒的な兵力で南を圧した朝鮮人民軍は電撃的にソウルを占領し、韓国軍は敗走した。

米国は、韓国が北朝鮮軍の攻撃を受けると直ちに韓国支援の熊勢をとり、国連安全保障理事会で北朝鮮を侵略者と認定した決議を通した。二十七日には海軍の行動を決めた上で、再度安保理事会で軍事行動を公認する決議を通す。地上軍派遣の決定は三十日に下され、日本から米第八軍が出動していった。

七月八日、マッカーサー書簡に基づいて吉田内閣は八月十日警察予備隊を発足させた。米国は日本の基地から大軍を朝鮮に送ったため、その後を埋めるため、日本政府に七万五千人の警察予備隊の創設を指令したのである。これがその後の日本の進路に重大な意味を持つようになるのである。

八月には北朝鮮軍が、韓国軍と米第八軍を洛東江の南の釜山地区に追い詰めた。朝鮮戦争の勃発は、米国のアジア戦略における日本の地位を高める結果になった。

米韓国軍は当初は北朝鮮軍の攻勢に押し捲られ、後退をつづけた。しかし、北朝鮮軍も補給路が延びきり、最後の防衛線を抜けずにいた。そして、九月十五日マッカーサーは仁川上陸作戦を敢行し、ソウルを奪回する。北

朝鮮軍は総くずれとなった。十月三日、米韓軍は三十八度線を越えて北進した。

平壤は陥落し、北朝鮮の広い地域が解放され、米韓軍は鴨緑江に近づいていた。このとき中共軍が彭徳懷に率いられて人民義勇軍として参戦したのである。中共軍は米韓軍に壊滅的な打撃を与えた。米韓軍は敗走し、三十八度線の南に退却した。二十六年一月四日、中朝軍はソウルを再び占領した。

朝鮮での共産主義者の攻勢に対抗するアメリカの総司令部は共産党を抑え込んで、その実力闘争を封じる軍事力を日本政府に持たせることが必要と考えた。また、後方補給基地としてその重要性が認識された。

最初の出動で米第八軍はみな朝鮮に出払い、日本各地の米軍キャンプはしばらくの間空っぽになっていた。

朝鮮戦争の勃発は、米国のアジア戦略における日本の地位を高める結果になった。

(二)オクラホマ州兵の駐留

昭和二十六年二月二十六日付の北海道新聞は

米陸軍は二十四日、日本の安全保障を強化するためカルフォルニア四十、オクラホマ四十五の両歩兵師団を三月下旬日本に送り、今後の訓練のため日本に駐留させる最初の州兵師団で、朝鮮に出動した占領軍と交替するものとみられるが、必要とあれば朝鮮に送られるかもしれない

と伝えている。

米オクラホマ州兵第四十五師団先発部隊を乗せた輸送船ジェネラル・

ゲーファイ号が三月二十八日、米ミシシッピ州メキシコ湾のニューオリ

ンズを出港した。小樽に到着したのは四月二十五日のことであった(高橋一九八二)。

「雷鳥」のマークを腕につけた第四十五歩兵師団の主力、人員ははっきりしないが一万二千人から二万人が千歳に進駐したと言われる(註一六)。

この部隊は、オクラホマ出身の未訓練兵部隊で、大量進駐で基地内の施設が追いつかず、ママチ川の上流に幕舎(二十人程入れる大型テント)を設営し、当初一か月にわたり野戦訓練がなされた。オクラホマ州兵の新兵訓練は州内で十五週、北海道で三十二週におよんだといわれる。

厳しい訓練と殺伐とした幕舎生活、前途に待ち構えている朝鮮戦争、一か月ぐらいたって「外出許可」が出ると、旧室蘭街道(現国道三十六号線)や根志越南街道、用水通りに文字通りGIがあふれた(写真一)。

中堅サラリーマンの給与が六〜七千円の時代に、これといった必需品を持たずにやってきたこともあり、

バケツ、ホウキなどが千円単位で売れた。



写真一 用水路通のにぎわい(『基地の子』光文社より)

「東京横浜方面からの商品を飾ったいわいるスーベニア・ショップが、兵営近くから繁華街まで続き、今までの商店も必ず店の一部そうした土産品を置きはじめた。一日に二〜三十万円の売上げのあった洋品店もあった。昔からの老舗も次から次と二階建の、すばらしいものに改築されて、すっかり見違えるようになった(註・七)。

昭和二十一年の千歳の人口は一万千七百七十四名に過ぎなかったが、二十五年には二万二千二百二十人と急増する。

パンパンと呼ばれる売春婦が全国から集まった。町はみるみるふくれ上がり、キャバレー、ビヤホール、飲食店がつきつぎに造られ、それらの二階にはパンパンハウスという仕組みだった。いたるところに横文字の看板がならび、下卑たレコードの音楽が町中に鳴り響いている中を兵隊がパンパンと抱き合っていた(山下一九五二)。

旧室蘭街道沿いにわずかにあった集落が瞬く間に幸町、清水町、東雲町、朝日町へと広がっていった。

この年、農地を宅地に変更する申請が相次ぎ、新築許可申請は六月五十七件、七月百九十九件、八月は百十件を数えている。

キャンプ・チトセの日本人要員も二十六年三月は八百名、八か月後にはそれまでの三倍ちかい二千三百人に、さらに翌年には三千八百八十三名と加速度的に増えている。職種も人事、通訳のような事務職からボイラーマン、運転手などの技能職、そして米人宿舎のメイドなど五十種類におよんでいる。

昭和二十四年の連合軍労務者給与表によれば、通訳の平均給与が一万一千七百十一円、運転手の平均給与一万二千五百五十三円、ボイラーマンの平均給与一万二千四百六十七円と当時の一般勤労者の平均給与を上回っていた。

基地内では兵舎の建設が急がれ土建業者数社が入り、五千人の労務者が

これらの工事に携わっていた。日本人向けの呑屋の屋台が用水通り沿いに建てられた(註・八)。米兵目当ての夜の女や一獲千金をねらう業者が続々と入り込んできた。

朝鮮戦線へ投入されるといふ不安と恐怖がG I達を、酒と女の待つ夜の町に走らせた。輪タクが走り回る。パンパンが群がって散る。

ビヤホールが十一軒から五十八軒に増え、ウィークデーにはトラック二台、週末には四台分のビールが運ばれた。「サッポロビール」の道内販売量の半分のビールがG Iたちの胃袋に流し込まれた。

銭湯で入浴を断られたパンパン達が千歳川で水浴する、事件は起きるでメチャクチャだった。その当時の模様を『千歳・開基百年記念誌』は次のように記載している(註・九)。

米オクラホマ州兵師団一万二千人が朝鮮戦争の後方部隊として駐屯、そしてその消費力をあてこんだ大勢の商人が千歳に入り込み、町は思いもよらぬ様相と化します。日に三〜五戸の割合で新しくできる建物のほとんどが、キャバレー、ビヤホール、そしてバラックの飲食店などで、いたるところに横文字が並び、騒がしくレコードの音楽が街中鳴り響く中を酔った米兵が群れをなして享楽を求めさまようありさまは、さながら『西部劇の町』を思わせるような状態でした。

六月十四日、リッジウェイ最高司令官は夫人ならびに総司令部高官多数を引連れ空路北海道を訪問、第四十五歩兵師団の野外訓練を視察のうえ東京に帰還した。

「州兵の風紀問題と性病対策が憂慮問題として関係者のあいだで論議され」た(神崎一九五二)。その結果、GHQを通じて外務省に勧告をあたえると同時に、北海道終戦連絡事務所に対して嚴重な申入れがおこなわれた。

昭和二十七年一月に雑誌『改造』の特派員として千歳にきた評論家の神

埼玉は「カチューシャのいる町」北のチトセ」というルポを、七月号の『改造』に発表している。

一、風紀取締の徹底化

二、性病の予防措置

三、性病者の治療

外務省がどんな処置をとったかは、知られていない。北海道の関係機関が、あつまって相談をはじめた。チトセの町役場では、サッポロの条件（マツ）をそっくりそのまま持つてきて、六月二十一日、「風紀取締条令」を大急ぎでつくりあげた。

第一条 この条例は、道路その他の場所における売春のための客引行為等を取締ることによつて、善良の風紀を維持し、社会秩序の健全な発達をはかることを目的とする。

いわゆる客引条例である。道路上でのあらわな客引行為が禁じられているだけで、売春行為そのものは、なんらの抑制をうけていない。

(中略)

チトセ・キャンプでは、七月十四日、「チトセ町一帯を立入禁止区域にする」ことを考慮中である」と最後通牒的な警告を發した。

(中略)

七月二十日、北海道知事室で、関係機関があつまって性病対策を協議した。

(中略)

ハウス業者をあつめて、八月三日、急造的に結成された「チトセ町睦会」は、キャンプ当局と町警察の熱心な示唆にのどづくものであった。町警察が、ハウス業者にあたえた「性病予防・風紀の維持・防犯対策上の要請事項書」には、次の事柄がうたわれている。

一、検診の励行

二、居室等の保健衛生

三、米兵の遊興時間を午後一時までに厳守
四、飲食物、ウイスキー提供の禁止

これにたいして、MPもまた、違反の事実を発見すると、オン・リミットをとりつけてオフ・リミットの処分をすることになっていた。

一、衛生的な居室・台所

二、検診カードを持たない接客婦の存在

三、軍物資の取引

四、午後十時四十五分以後の飲食提供

こうした対策をおしてうかがわれるのは、在日アメリカ軍当局が、「もし性病にかからないように要心（マツ）をし、そして門限をさえおくれなければ、パンパンとあそんでいてもかまわぬ」という態度をとっているらしいことである。

第二は、取締の便宜上とはいいいながら、ハウス業者の組合を利用していることで、彼らの組織的売春・集团的売春をみとめるのと同じ結果をうんでいる。いわゆる協力関係における売春営業は、一種の公娼性をおびてくるのではないか。この性病中心主義と、集団売春の容認は、ひとり北のチトセばかりでなく、アメリカ軍隊の存在するあらゆる軍事基地の風紀対策の共通的特徴となっている。

千歳の保健所の四月から七月までの検診では検診数四千九百八十二名に対し、罹患者数は千百三十一名、比率は二二・七割であった。全国的な平均の数字とされる。検診の結果、性病罹患者が次第に減っていった。検診所の検診に合格しなかった女性は、治療中検診カードを取り上げられる。検診所へ通つて定期的に検診を受けているというだけの一枚の紙片が実際のには売春婦の登録カード、売春婦の免許証といったような性質のものに変わってくるのである（神崎一九五二）。

パンパンハウスは、市街地全域に二百五十軒あり、このうち睦会の表札を出しているのは百八十軒であった。ハウスは、表向きは貸間業という形式になっていた。警察には、一万二千円程度の下宿料、部屋代と食事代しかもらわぬ、女の売春行為に関係ないという形にしておかなければ勅令九号の「婦女子に姦淫を強いてはならない」にひっかかるからだ。実際には部屋貸と歩合制があり、部屋貸では女の収入からショートタイム百五十円オールナイト五百円をその都度女の収入から引き、また、食事代として百五十円取り立っている。歩合制では、四分六、または切半であった。これは完全な娼家経営であった。

神埼清は彼らを

完全なサクシユ者という印象であった。こうした非合法のサクシユ者が、組合をこしらえて、女を管理し、そのまた組合が、警察と役場につながり、キャンプ当局者にまでつながって、アメリカの兵隊のために日本の若い娘の肉体を提供させる組織的な社会体系のようなものができあがっているところに、かつまたアメリカ本国の当局が、これを否認しないかのごとく見えるところに、基地風紀問題の反人道的な重大性があるといいたいのである(註・十)

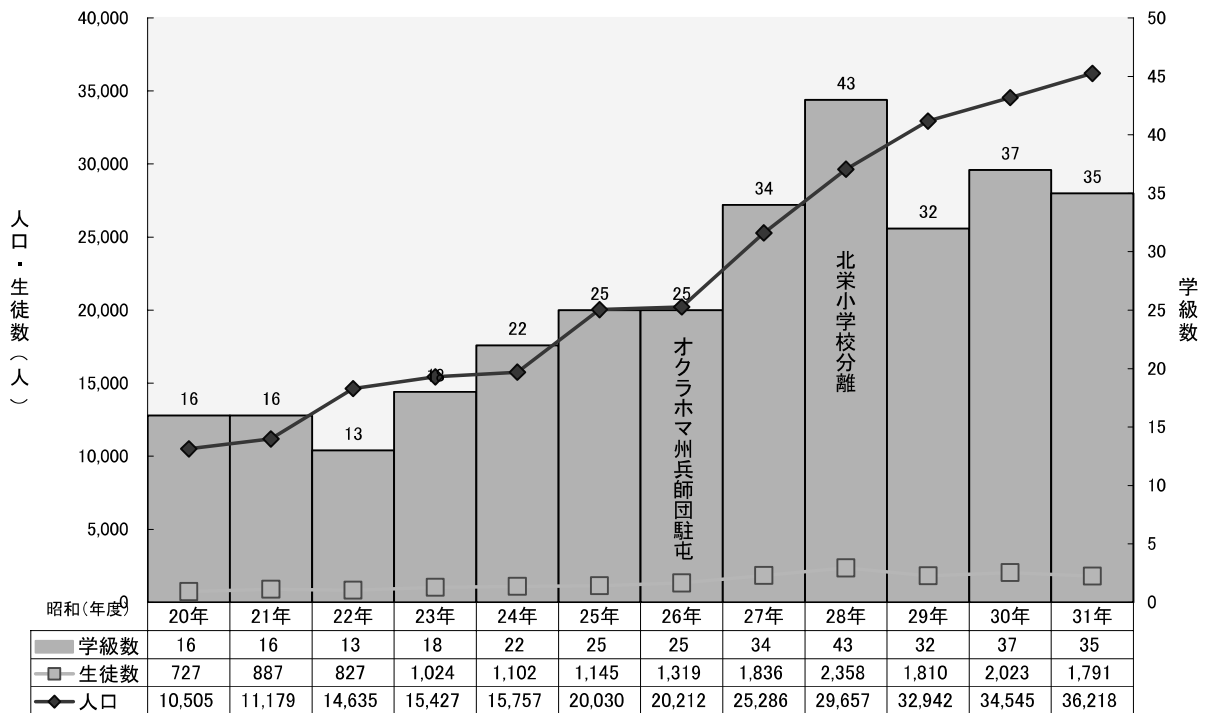
と指摘する。

こうして得られたものがビールの泡や女の口紅を通して千歳の街に落ちていた。

オクラホマ州兵は、昭和二十六年十二月、逐次朝鮮戦線に出勤する。

(二)人口増と荒廃した教育現場

人口は昭和二十五年を境に増え始め、二十七年には五千七十四名、二十八年には四千三百七十一名と急増する(表・一)。特徴的なのは女性の占



表一 千歳の人口と千歳小学校の生徒数・学級数の推移

める割合が高いことである。二十六年には千七百二十五名、二十七年には二千六百六名を数える。これらの中に米兵を目当てにした女性が多く含まれていたことは言うまでもない。

人口増の影響をもろに受けたのが学校現場であった。千歳小学校の児童数は昭和二十六年には千三百十九名だったのが、二十八年には二千三百五十八名とわずかの間に千三十九名が転入している。学級数も二十五学級から三十四学級と九学級も増える。

増えつづける児童に、机、教科書、そして教室が不足した。二部授業で急場を凌いだるが、翌年には分離・新設を余儀なくされている。

もう一つは米兵目当てに全国から集まった女性と性風俗教育問題であった。千歳小学校の教諭千葉誠が調査し、昭和二十七年、第二回日教組全国教育研究大会で「軍都・快楽の街・北海道・千歳基地」を発表し、学校教育の問題で全国にその名を売った(註一十二)。

この報告で六年生の女の子の綴り方が紹介されている。

千歳の街

六年(女) Y・N

千歳の街は、ビヤホールが多いので私たちが勉強する気になっても、うるさくてできません。ビヤホールを少なくしてほしいです。それから川でせんたくしたり(註)パンパンが随分洗濯している川にごみをなげたりすることはやめてほしい。千歳の街にへんな女の人が、たくさんいて、がやがやさわいで歩いて、うるさいからいなくなればいいと思います。きよねんはこんなことはなかったのにことしにかけてふえて私はどこかにうつつていききたいと思います

現実をナイーブな感性訴えている。

子供たちの作文を分類してみると「パンパンがいやだ」などの理由で千

歳を「好ましくない街」と書いた子は約五十五割もいたが、「よい街」と答えた子は約三割にすぎなかった。

特殊女性に間貸ししていた家庭は約一割もあり問題の根深さを物語っている(註一十二)。

(四)帰還兵・第一騎兵師団

昭和二十六年の十二月末から一月に、馬のマークの第一騎兵師団が朝鮮戦線から帰り、後を引き継ぐ。

第一騎兵師団は、太平洋戦線ではレイテ・北ルソン(フィリピン)を転戦し、終戦後東京に進駐していた。

昭和二十五年八月、第二騎兵師団は、千四百五十名の補充を受けて総員一万二十七名(充足率六十割)となり、十二、十四日横浜で乗船、十五日出港、二十二日朝鮮半島南部の迎日湾(慶州浦項市)に上陸した。

北朝鮮軍は、韓国軍と米第八軍を洛東江の南の釜山地区に追い詰めた。第一騎兵師団が迎日湾に上陸したときの総員は、約一万人であったが、二十三日から三十一日にわたる十日間の遅滞戦闘で戦死七十八名、負傷四百十九名、行方不明四百十九名、計九百十六名(約九割)の損害を受けた。

その作戦要領は、第二十四師団の兵力の逐次加入の方式とまったく異なり、その全力をもって永同(中清北道)と金泉(金泉市)の二か所で防御したものである。

第一騎兵師団が敵に与えた損害は約二万名で、主として砲・迫撃によるものである。しかし、第一騎兵師団が小白山脈で敵を食い止めてくれるかもしれないというウオーカー將軍の期待は満たされなかった。第一騎兵師団は、北鮮第三師団の攻撃を阻止できなかったのである。

手痛い損害を受けた第一騎兵師団は、昭和二十六年十二月、朝鮮戦線から千歳の第二基地に帰還する。

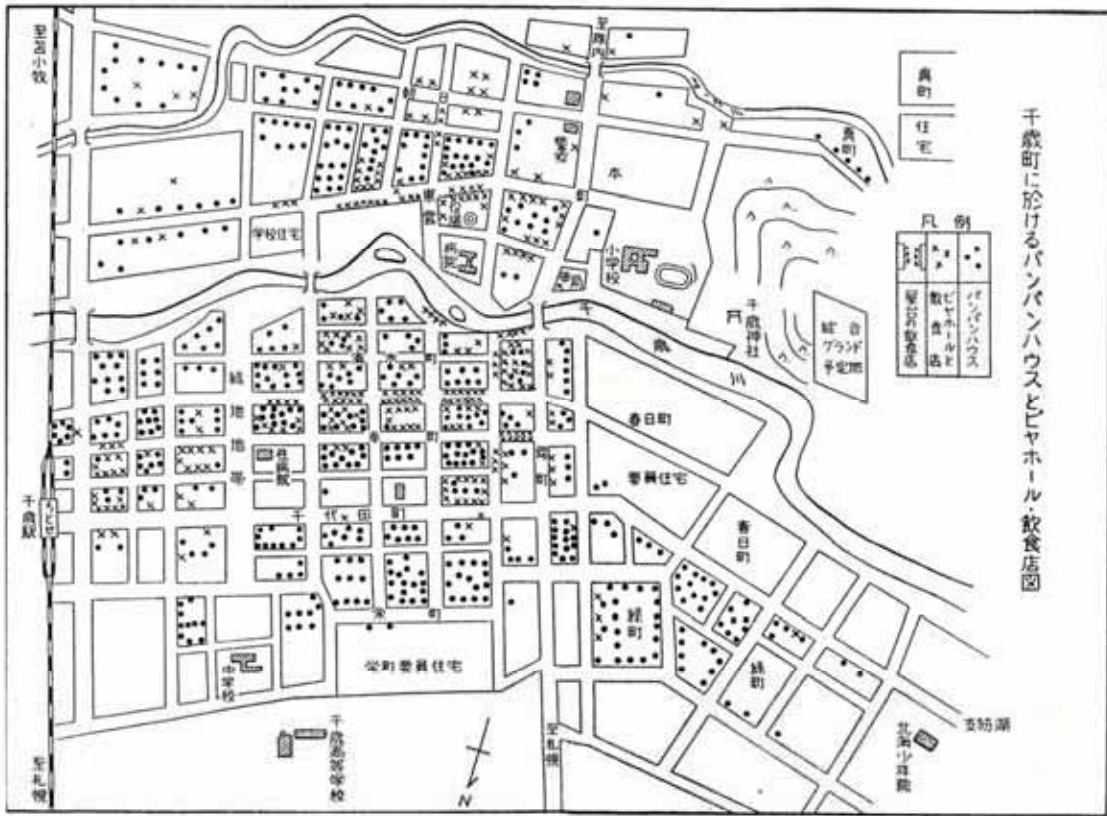


図-1 パンパンハウスとピアホール・飲食店分布

朝鮮帰りのGIは気が荒くなっており、オンリーの争奪戦も血で血を洗うやりとりであった。

オンリーを含め夜の女は二千人を超えた。オンリーは、いわゆるオンリーワンで純粋の洋妾ないしはガールフレンドで、米兵と結婚できると信じている者、実際に手続中の者も少なくなかった。彼女達は米国文化に心酔し、米兵との安易な愛情生活に陶酔していた。しかし、オンリーの中にも安易にバタフライ(浮気)しているものも少なくなかった。

- 先述の千葉誠が二十七年八月十九日に調査した結果によれば、純然たるハウス四百二十三軒、パンパンに間貸七十七軒、店の二階をパンパンに三十九軒を数えている。欄外には「1. 千トセ街全体がパンパンの巣である。2. 街はずれ方(緑町)はオンリーが多い。3. 中心街は階下が普通の店で、二階を大きくとってパンパンに間貸している。4. 二坪位のブラック作りの屋台が多く労働者とパンパンが利用している。設備は不衛生である。5. アメリカ専門の土産店が、本通りと繁華街に多い」とある(註・十三、図・一)。

特殊女性の増加とともに、性病は米軍基地内に広がっていった。

幸町四丁目にあった北海道立幸病院(図・一、緑地帯そばの性病院)によると昭和二十七年四月から三月までの一年間に検診した女性は千八百九十四人、このうち二百十五人が梅毒に、千二百一人が淋病に、四百七十八人が軟性下疳(げかん)に罹患していた。

昭和二十八年五月二十六日、第一騎兵師団クラーランド少将は山崎町長ら町幹部と面談し、徹底取締りを申し入れる。町も本格的な対策に乗り出す。この辺の事情については幸病院発行の『千歳町における売春婦の実態』に詳しい(註・十四)。

昭和二十八年五月千歳町では、「特殊貸間業認証に関する特別措置条例」案を

発表し、これによって風紀の浄化、性病の撲滅を図ろうとしたが、札幌地検、道庁、国警側から公娼制度復活の危険ありとして反対を受け、同年六月「風俗営業取締法施行条例」を改正の案も出たが、国警の反対でこれも立消えとなり、結局「千歳町風紀取締条例」の一部を改正し併せて自肅協力機関を設けることで落ちついた。しかしその後も内外の世論と批判の目は厳しく、自肅協力機関たる自肅振興会は、オンリー、女給等を含めて「自発的全面検診」を実施するに至った。更に同年十二月十八日外務省国際文化風紀委員の「米軍に対し千歳町を立入禁止地域として要請する」と決議した旨がもたらされ、一方、国警札幌方面隊の「ハウス業者の存在は許さない」の取締方針も目を追って峻烈となり、同年十二月十二日には、ローズクラブ（ハウス業者の組）は解散と決定（解散時百四十軒四百五十人）昭和二十六年六月睦会として発足以来三十ヶ月にして、その幕を閉じるに至った。

その後、業者の転廃業が進み、昭和二十九年二月一日では下宿業四、飲食店四、旅館五、カフェー二十五、料理店五、オンリーハウス十三、質屋二、古物商二、無職二十一、引揚（九州へ）十二となっている。

第一騎兵師団が二十九年十月、内地に移駐するとパンパンたちは潮を引くように散っていった。

(五)朝鮮戦争の終結と日本の復興

米国内では、国務省は占領を長引かせず、早期講和の促進を図ろうとしたのに対し、軍部は日本での軍事基地の継続利用と日本の再軍備とを望んで講和尚早論を説いていた。

トルーマン大統領は共和党のJ・F・ダレスを対日講和問題の顧問に任命し、調整に当たさせた。調整がついたのは昭和二十五年に入ってからである。軍部は講和後の基地利用と再軍備を日本に受け入れさせることを前

提に早期講和を認めたのである。

米国は中国革命や朝鮮戦争を機に、対日政策を転換させ、共産主義を追究して再軍備を指令した。しかし、吉田茂は再軍備に抵抗し、日米安保条約を提案し、軽軍備と経済復興最優先の路線を打ち出したのである（天川一九八八）。

東欧に対するソ連の支配、朝鮮戦争及びソ連による原水爆の開発は米国人の間に恐怖を植え付けた。

昭和二十六年三月十四日、米韓軍ソウル奪還。四、六月、米韓軍三十八度線を突破。戦線は膠着状態に。マッカーサーは鴨緑江以北の爆撃を主張し、戦争の拡大と原爆の使用に勝利の可能性を見ていたマッカーサーは、四月十一日、トルーマン大統領に解任される。

これがシグナルとなって平和の機運が高まり、昭和二十八年七月二十七日、休戦協定が調印された。

戦争によりおびただしい死者が出た。韓国軍の死者は三十万人。米軍は十四万人、国連軍は一万四千人と発表されているが、北朝鮮軍と中国人民義勇軍の死者は二百万人と推計される。

十月、アメリカ政府は「対日講和の骨子を「対日講和七原則」として公表した。米軍特需と輸出が伸び、その後の昭和三十年代からの高度経済成長の基礎をつくった。

(六)基地経済

日本側の米軍の調達に対する受入業務は、昭和二十年九月五日に外務省の外局として終戦連絡中央事務局が発足し、九月六日には京都と横浜に地方事務局が置かれ、のちに十七か所に増やされた。

昭和二十年九月三日、GHQから指令第二号が出され、米軍の直接使用のために供給する所要資金及びその要求する物資、サービス、労務などの

調達に必要な経費はすべて日本側が負担することになった。したがって昭和二十一年度以降は、終戦処理費として財政支出となり、講和発効の前年の昭和二十六年六月三十日まで、日本政府が負担することになるのである。昭和二十年十月五日、米第五航空軍約二百名が千歳基地に進駐すると、町に対して労務提供を要求した。町は町内から約百名から二百名の日雇い労働者を当初毎日出した。

昭和二十年十月十五日、終戦連絡北海道事務局が、町役場会議室の一部を使用して開設、労務の斡旋、賃金の支払い業務を開始した。その後労務者の増加に伴い、住宅管理業務として元海軍省所管の住宅を有家族者に、元海軍航空廠女子工員寄宿舎(清和寮)を独身者に使用させたが、住宅管理業務は翌二十一年四月十五日、札幌管財局千歳出張所に移管された(長見一九七九)。昭和二十二年九月一日には公法人特別調達庁が発足、調達業務は特別調達庁に集中されていった。各地方では、都道府県が涉外関係の係を設け、知事が最高責任者になった。

当初は地方事務所長、市町村長、警察署長、勤労動員署長などが中心になって占領軍受入れの各種機関が設けられた。町の職員は五十名程度、町の業務は労務提供、両替など多岐にわたった。

進駐軍要員の雇用は町への経済効果は大きなものであった。反面、米軍の部隊の都合で採用、解雇が繰り返され不安定なものであった。オクラホマ州兵師団が駐屯していた頃、要員の雇用は二千三百人にも達していたという。

「米占領軍は日本軍が中国で行ったような現地徴発は行われなかった。(中略)日本政府から占領軍にたいして終戦処理費という名目で、毎年、日本銀行券の形で占領軍の現地調弁費を納めさせ、これを占領軍は使って日本の物資や労働力を動員利用した」(註一十五)。

米軍の進駐により、スーパーニア・ショップ(土産店)や商店が増える。

(単位：千円)

種 目	歳 入		
	25年	26年	27年
町税	22,256	41,052	75,173
地方財政平衡交付	14,290	15,546	26,479
公企業及び財産収	744	1,425	2,290
使用料及び手数料	556	1,857	2,969
国庫支出金	9,143	11,726	21,518
道支出金	1,821	6,921	293
寄付金	701	2,239	603
繰越金	3,905	4,466	3,313
雑収入	1,372	2,890	3,669
町債	3,000	8,200	12,800
計	557,788	96,322	149,107

表一 2 歳入の変遷

また家の新築増により大工や、輪タクを商いとする人などの転入が目立った。やがて兵隊を直接相手にするビヤ・ホール、ハウスなどが瞬く間に出現する。九州など他の地域から転入してきた人が多かった。そうした人々は地域や既存の人間関係を抜きにした「利潤の追求」を目的としていた。基地内の兵舎建設、兵隊の落とす金や進駐軍要員の雇用増など町の経済を潤すという側面も大きかった。

町の税収も二十五年に二千二百二十五万六千円が、二十六年は四千五百万二千円(百八十四割)、二十七年には七千五百七十三万三千円(百八十三割)と驚異的な伸びをみせる(表二)。

また、昭和二十五年のシャープ勧告により創設された地方財政平衡交付金は二十七年には二千六百四十七万九千円であった。人口規模の近い砂川町が三百三十六万二千円で、千歳における特殊事情に対する政策的であ

(単位：千円)

種 目	歳 出		
	25年	26年	27年
会議費	1,038	815	1,644
役場費	8,890	8,152	9,691
徴税費		2,171	3,159
監査委員費		78	99
警察消防費	4,915	8,629	12,582
土木費	10,784	11,191	17,250
教育費	10,167	30,274	61,719
社会及び労働施設費	9,693	21,368	18,043
保健衛生費	1,286	804	1,557
産業経済費	1,649	4,555	6,813
財産費	819	1,367	1,340
統計調査費	316	362	433
選挙費	548	660	961
公債費	1,034	1,466	2,864
諸支出費	2,184	2,111	3,873
予備費	△199	△210	0
計	53,323	93,009	141,028

表-3 歳出の変遷

ろう財政補助の大きさがわかる。

一方、急激な人口の増加に伴う教育、労務者集合施設、住宅などの諸施設費や治安維持のための警察吏員定数を十四名から二十五名への増員するなど、進駐軍諸費の増加をみている。

特に教育費の伸びが著しく二十五年の一千六万七千円に対し、二十六年には三千二十七万四千円（二百九十七割）となっている(図-1)。

町長山崎友吉は、昭和二十五年十二月十五日、札幌特別調達局長宛に「連合軍接収予定地の各種補償申請について」の文書を提出している。

これには、米軍の演習地などで接収される地域に住む農家（シユクバイ、アウサリ）や薪炭業者（ママチ）など四十六人の「除却」される家屋建築費、動産移転料、作付、炭釜など多岐にわたる補償費を積算した調査が添付されている。

昭和二十六年四月のオクラホマ州兵の駐屯に先立って幕舎の設営地や予定されていた三十二週の訓練のための演習地が早急に必要とされたためである。

職員が五十名程の町役場に米軍の駐留に伴い補償調査や移転交渉など過大な事務が課せられる。その後も接収の賃貸契約や進駐軍要員の手配など駐留軍関係の事務が増え続ける。

昭和二十八年十月十一日、千歳飛行場と陸軍師団本部のあった真駒内の在日米軍キャンプ・クロフォードと連絡、物資運送を目的として造られた弾丸道路が完成した。

建設費八億七千二百万円は、進駐に必要な施設建設に使われた道路特別事業の「安全保障費」か

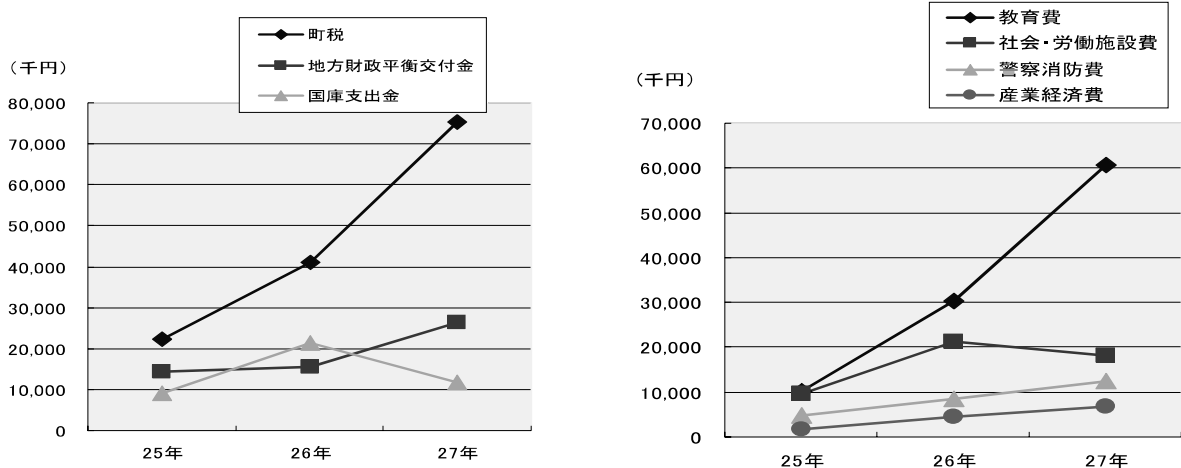


図-2 歳入歳出の変化

年度	月	進駐軍要員	摘 要
20年	5月	200名	第5航空軍の進駐により労務提供を要求
21年		200名	
22年	8月	1,300名	労働組合の賃上げ要求頻発
23年	3月 12月	950名 750名	三沢基地への移動により2割転属、整理解雇 約15名の減員
24年	6月 12月	460名 615名	部隊交代常備労務者約250名、日雇労務者150名解雇 逐次増員
25年		615名	
26年	3月 4月 11月	800名 2,300名	オクラホマ州兵師団駐屯 第2基地新設
27年	3月	2,883名	
28年		*	施設の新設と共に大幅に増員された要員も基地の完成により労務提供は削減され、部隊の移動により逐次減員
29年	9月	*	陸軍の撤退により1,828名大整理 陸軍の駐留により33年3月までに1,626名再任用

表-4 進駐軍要員の変遷

(*実数不明)

ら持ち出されている。国道三十六号線は、その後日本側に多くの利便を与えたなど駐留軍が千歳にもたらしたのも少なくなかった。

神崎清の試算によると、州兵師団を一万五千人、「月給を平均百ドルとおさえて、その三分の一を遊興飲食に使えものとすれば」一か月四十九万五千ドルが千歳の町におちることになる(神崎一九五二)。一ドル三百六十円に換算すると一億七千八百二十万円である。

当時警察官の初任給は四千五百円であるが、現在の警察官の初任給は、高卒で十六万五千二百三十四円、約三十五・六倍である。現在の金額に勘案すると六十三億四千三百九十二万円になる。これに米軍進駐要員の給与などを考えると米軍による実態経済は極めて大きいことになる。

しかし、それらは米軍経済に依存したいびつな産業構造(基地依存経済)であり、米軍の動向に大きく左右され「結果的に」経済的自立の基礎づくりが遅れたことは否めない。

米軍の駐留の規模が縮小すれば基地経済が短期間で消滅するのやむを得ないことであった。

三. サンフランシスコ講和条約の締結

昭和二十六年九月八日、サンフランシスコで講和条約が調印された。講和条約には、極東軍事裁判その他の連合国の戦犯裁判を日本が受諾する旨の条文があるが、日本が主催国として国連憲章五十一条の個別的又は集団的自衛権をもつことと、日本が集団的安全保障の取り決めを自発的に締結することを許すなど、敗戦国に苛酷な条件と制限を課すものでなかった。

九月、こうした日本民主化措置は、その競争力の除去を主眼としており、対日賠償請求の軽減ももっぱらアメリカの対ソ戦略の面からとられた措置であった。二十五年に勃発した朝鮮戦争に促されて米国主導のもと、翌二十六年、ソ連、中国を除外した形でサンフランシスコで講和条約が締結

された。

講和条約は、

(一) 領土

- ① 朝鮮の独立の承認
- ② 台湾と澎湖諸島に対するすべての権利の放棄
- ③ 千島列島とポーツマス条約で得た樺太の 一部のすべての権利の放棄
- ④ 琉球諸島、小笠原諸島のアメリカ合衆国を唯一の施政権者とする国連の信託統治下に置く

(二) 賠償

日本が戦争中に与えた損害や苦痛に対して支払う

(三) 国内措置

極東軍事裁判戦犯裁判の承諾、個別的、集団的自衛権の保有

とするものであった(天川一九八八)。

昭和二十八年七月、板門店で休戦協定が結ばれ、四百万人以上の犠牲者を出した朝鮮戦争は終わった。

「朝鮮戦争によって東西冷戦の軍事化と世界化は決定付けられた。(中略)ヨーロッパからアジアにまたがる反共軍事包囲網が形成され、世界は東西両陣営に色分けされた。朝鮮戦争は朝鮮の分断を固定化し、台湾の軍事的解放を不可能にし、その後二十年に及ぶ米中対決の原型を形成したのである(岩田二〇〇〇)。

戦争放棄の規定は、政府の解釈で「自衛の保持は可能」とされ再軍備の道を歩みだした。日本の経済は、朝鮮戦争の特需景気によって疲弊から回復した。

四. まとめ

米軍の進駐が、要員の採用、解雇など行政、社会に及ぼした影響は大きいものであった。

米軍による占領政策は、戦勝側による「文明の裁き」や「勝者の裁き」はともあれ共同謀議理論の適用など無理があることも多々あった。

マッカーサーが父アーサーがフィリピン軍事総督として試み果たせなかった社会改革の実現や米共和党大統領候補を意識したこともあり、歴史的に見れば、連合軍による占領はよりましな占領であった。

しかし、それは占領軍と被占領側の関係においてである。米軍側の事情、利害によって占領政策は左右された。

日本経済の自立化の要請は、米ソ冷戦の激化、何よりも中国本土が急激に共産党の支配下に入ろうとする勢いは日本を強化してアジア安定の基地にするという政策転換を生んでいった(袖井一九八八)。

昭和二十五年の朝鮮戦争の勃発は日本のその後を変えていった。日本にいた米第八軍はみな朝鮮に出動した。日本の米軍キャンプは空っぽになり、やがて米軍本土から増援軍が到着し、日本で体勢を整えて朝鮮に出動していった。その入れ替わりに負傷者など朝鮮戦線から後送された。彼らは皆日本を通過していった。キャンプ周辺に集まる。パンパンと呼ばれる売春婦が急増した。

繁華な通りは、背の高い米兵が道路一ぱいに溢れて活歩し、得意顔に口紅を濃くした足の短いパンパンが、ぶら下がるようにして手を組み、街の辻々には獲物を狙う彼女たちがズラリと並ぶ。街には破れかえるようなアメリカジャズの騒音。独立国日本人がその間をオドオドしながら歩いている(註・十六)

町は狂乱と化した。

昭和	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
部隊名										
陸軍第2空挺師団		4月	7000人							
第7歩兵師団					2月	7000人				
第45歩兵師団 (オクラホマ州兵)							4月～ 12月			
第1騎兵師団							朝鮮から 12月	7000人		10月

図-3 千歳に進駐した主要部隊と人員

倒産、失業にあえいでいた日本経済は米軍特需と輸出の伸びにより昭和三十年代から高度経済成長の礎をついた。そして朝鮮戦争は日本とアメリカとが永続的な独特な同盟関係を結ぶ条件となった（和田一九八八）。

米国は中国建国や朝鮮戦争を機に、対日政策を転換させ、共産主義を追放して再軍備を指令した。そして日本との講和を急ぎ、朝鮮戦争中の二十六年、サンフランシスコ講和条約と日米安全保障条約を結び、日本を米国の陣営につなぎとめた。

千歳には、昭和二十一年の第十一空挺師団から二十九年の第一騎兵師団まで七千人から一万五千人の米軍将兵が駐留した（図-三）。その多くが二十代前半の若い兵であった。千歳は、軍とともに有為転変した。国と国

昭和19年陸地測量部撮影の写真を複製したものである



写真-3 戦前の千歳（昭和19年）（財）日本地図センター提供

の狭間にあつてその現実を撥ね付けるのは難しかった。

千歳は、戦後日本で最も大きく変化した町のひとつである。軍国主義下の社会の生活規範、価値観、道徳観が崩れ、占領という体験によつてたらされた米軍文化を実感した。それは他の地域とは比較にならないほど可及的で影響が大きかった。新しい社会の仕組みやモラルはまだ確立されていなかった。



写真-4 戦後の千歳

千歳の町民は、占領、米国人、米国社会など「戦後」という時代に遭遇し、適合していった。人々は彼らのもたらす金を目当てにスーベニア・ショップやビヤホールなどの商売を始めた。市街地は急速に拡大していった。

基地千歳における売春を、一言でいえば「基地売春」というべきものである。大量且急激な外国部隊(米軍)の駐留により生じ、彼ら外国人を相手としたむき

だしのままの売春行為である。それは、旧公娼時代の伝統をもつたものから、オンリーという形態に至るまで、まことに多種多彩である(註一七七)。

九州などから多くの人間が入り込んだ。米兵を相手にするパンパンが町にあふれた。朝鮮戦線への出兵を目前にしたオクラホマ州兵、修羅場を潜り抜けてきた第一騎兵師団兵、彼らは緊張感と刹那、あるいは安堵感に包まれ千歳を舞台に、一ドル三百六十円の経済力を背景に欲望をあらわにした。

それを取り巻く人々には「利潤追求」を優先する拝金主義がはびこった。国と国の狭間で起きたこうした現実をこの町の人が否定することも排除することも難しかった。

公娼制度を承認し、特殊貸間業の認証に関する特別措置条例の対応にみられる、現状を容認し、小手先の改善に終始したのはそうした背景がある。しかし、彼女達により実際には大きな恩恵を受けた人間が多い(山下一九五二)のも、またそれらが市街地の急速な拡大や経済基盤の確立などそれ以降の町づくりの基礎をなしたのも事実である(図一三・四)。

米軍の進駐と基地経済は特殊な歴史のもと、特殊な状況下でつくりだされたものであった。夢幻はうたかたのように消えていくのは歴史の必然だった。

米軍の撤退、自衛隊の誘致、空港ターミナルビルの建設、工業誘致など人口増に係わる数多くの「変数」により千歳が蘇るのは昭和三十年代から四十年代になってからである。こうした変遷は千歳の歴史的風土となった。これらの風に晒されたエネルギーの持続がこの町を発展させる動因をなした。

本稿を作成にあたり文献、米軍について守屋憲治氏にご便宜、ご教示をいただいた。謝意を表するものである。

註・文献

註

註・一 平成七(一九九五年)『最新資料をもとに徹底検証する 昭和二十年
／一九四五年』p. 二百二十六 小学館

註・二 註・一に同じ。p. 二百二十八

註・三 守屋憲治 昭和六十(一九八五年)『北の翼―千歳航空史―』

p. 二百七〇～二百七十九 みやま書房

註・四 北海道新聞社 昭和五十四(一九七九年)六月二十五日「進駐軍」

『ちとせ百年 四十四(昭和・戦後)』

註・五 神崎 清 昭和二十七(一九五二年)「踏査報告 独立の断層・北のチ
トセ」 p. 百五十三『改造』 七月号

註・六 『千歳市史』では一万二千人(p. 三百三十八)と一万五千人(p. 五
百三十五)、『増補千歳市史』では一万二千人、『新北海道史』では二万人と
バラツキがみられる。本稿では、当時千歳に居住し実地調査した千葉誠の一
万五千人をとった。

註・七 千葉 誠 昭和二十八(一九五三年)

『軍都・歓楽の街・北海道千歳基地』 p. 十二『基地日本』和光社

註・八 註・七に同じ

註・九 千歳市 昭和五十四(一九七九年)『千歳・開基百年記念誌』

p. 二十二～二十三

註・十 註・五に同じ。p. 百六十一

註・十一 註・七に同じ

註・十二 北海道新聞社 昭和五十四(一九七九年)七月七日「特殊飲食店」

『ちとせ百年 五十一(昭和・戦後)』

註・十三 註・七に同じ。

註・十四 北海道立幸病院 昭和二十八(一九五三年)『千歳市における売春婦
の實態』 p. 五十六

註・十五 木村幸八郎 昭和二十八(一九五三年)五月「基地経済の問題点」

p. 二百四十五～二百五十六『基地日本』 和光社

註・十六 註・七に同じ。p. 十二

註・十七 註・十四に同じ。p. 五十五

引用文献

神崎 清 昭和二十七(一九五二年)「踏査報告 独立の断層・北のチトセ」

『改造』 七月号

千葉 誠 昭和二十八(一九五三年)『軍都・歓楽の街・北海道千歳基地』

『基地日本』和光社

北海道立幸病院 昭和二十八(一九五三年)『千歳市における売春婦の實態』

猪俣浩三・木村禧八郎・清水幾太郎 昭和二十八(一九五三年)『基地日本』

和光社

清水幾太郎・宮原誠一・上田庄三郎 昭和二十八(一九五三年)

『基地の子―この事実をどう考えたらよいか』光文社

奥田二郎 昭和三十六(一九六一年)『北海道米軍太平記・黒と赤の日誌』

山下愛子 昭和三十六(一九五二年)「チトセ」『婦人公論』11月号

陸戦史研究普及会 昭和四十一(一九六六年)十二月

『陸戦史集一 国境会戦と遅滞行動(朝鮮戦争)』

千歳市 昭和四十四(一九六九年)『千歳市史』

工藤和博 昭和五十一(一九七六年)「はる(春)のないはる(青春)〜売春婦の実
態調査より〜」『道庁文化』第四号

態調査より〜」『道庁文化』第四号

態調査より〜」『道庁文化』第四号

態調査より〜」『道庁文化』第四号

北海道 昭和五十二（一九七七）年 『新北海道史』第六卷通説五

千歳小学校開校百年記念誌 昭和五十三（一九七八）年 『足跡百年 未来へつづ

く』

工藤和博 昭和五十五（一九八〇）年 「はる（春）のないはる（青春） 第二部く売

春婦の実態調査より・売春と性病く」『道庁文化』会報三十四

長見義三 昭和五十四（一九七九）年 「渉外労務管理団体の沿革」『増補千歳市

史』千歳市

高橋昭夫 昭和五十七（一九八二）年 『証言北海道戦後史・田中道政とその時

代・』北海道新聞社

守屋憲治 昭和六十（一九八五）年 『北の翼―千歳航空史―』みやま書房

和田春樹 昭和六十三（一九八八）年 「朝鮮戦争―冷戦と日本の「役割」』週刊

朝日百科 日本の歴史 百二十四』朝日新聞社

北海道道路史調査会 平成十五（二〇〇三）年 『札幌・千歳間道路物語』

株式会社山三ふじや 創業二〇〇年記念社史編集委員会

平成十七（二〇〇五）年 『株式会社山三ふじや創業一〇〇年記念社史』

千歳の歴史的建築物調査

— 商家住宅と海軍官舎の事例 —

小田 賢 一

千歳市総務部主幹付主査

(市史編さん担当)

北海道建築士会千歳支部

はじめに

「千歳に現存する一番古い建物は何か？」この質問に即答することは難しい。もちろん、市域を歩き回り土地の古老に尋ねればそれなりの答えは出るかもしれない。その場合でも、住宅かそれ以外か、住宅であればどの程度までの増改築を認めるのかといった定義づけは必要になるだろう。

実のところ、千歳において明治から大正、昭和初期にかけての面影を伝える遺構は少ない。それは千歳という都市の特殊な成長過程に起因するのかもしれない。そういう意味では前述の定義は不必要ともいえる。

そうした地域特性における数少ない遺構の一つが、今回調査した商家住宅や海軍官舎である。

これらの建物は建てられた経過や性格の差こそあれ、現在まで人が住むという住宅本来の要件を満たしている。それゆえに、住んでいる当事者以外にその成り立ちなどは語られることもなかった。建物が存在し続けるのに必要なことは、適度な補修と人が住み続けることである。

今回の調査はこれらの建物の意匠的、構造的特徴を分析することにより、建てられた時代背景や市民生活との関わりをさぐることを目的とした。

一、時代背景

千歳は交通の街であった。明治六年の札幌本道開通とともに街道筋の宿場町として近代に名乗りをあげる。しかし、明治二十五年の岩見沢―室蘭間の鉄道開通は、千歳を近代交通から取り残された裏街道の寒村とした。

明治期の北海道開拓は、鉄道に代表される大量輸送機関を中心にしてダイナミックに変化した。したがって、鉄道駅を持たない地域の経済的活力は相対的に乏しかったことは否めない。そうした中であっても、当時の千歳の指導者たちはいかに村を発展させるかを考えた。

大正十五年、村の願いであった鉄道が開通した。この北海道鉄道開通を記念し飛行機が飛来することになった。この飛行機を着陸させるため、村では村民奉仕によって着陸場を造ることを決める。それから十二年後、三度の改装を受けた小さな飛行場は、長大なコンクリート滑走路を持つ海軍航空基地となり、現在の航空輸送の一大拠点となる礎となった。

調査対象となった家屋は、千歳が一寒村から表舞台に出始めた大正末から昭和初期にかけての時期に建てられたものである。

二、山三ふじや本宅

山三ふじやは、佐渡出身の渡部榮藏により明治三十八年に創業、現在まで百年続いている老舗である。大正年間に事業の基礎を固め、味噌、醤油、酒、衣類、燃料などの生活必需品を扱い、製材工場などを起こした。創業者の渡部榮藏は当時から村会議員として村政に関与し、村民奉仕の飛行場から本格的な飛行場への建設を推進し海軍航空隊設置にも尽力した。

この住宅は、渡部家本宅として店舗横に大正十四年に建築されたものである。昭和十年に天皇陛下のご誕生を記念して発行された「三村銘鑑録」に当時の全景が写っている(写真一)。

今なお当時の姿をよく伝えている建物である。



写真-2 現在の渡部家本宅



写真-1 山三ふじやと渡部家本宅（昭和10年）

・建築考察

この建物は建築後八十年の歳月を経過している。外観は洋風を思わせる軽快な急勾配の切り妻屋根である。屋根は店舗では葺葺きであるが本宅はトタン張りとなっていた。壁は下見板張り、窓はガラス上げ下げ形式とし、通りに面した箇所には一般住宅としては珍しく出窓を設けた。当時としては珍しく目立つたものであったと思う。

内部は一転して和風の造りである。住居であると共に商業を営むための多目的な用途を求められた建物と推察される。長い間、家人と共に千歳の幾多の出来事を見てきたのではないだろうか。

建築資材は、自らの製材工場で加工したのである。材質は当時まだ充分に採取できたえぞ檜（エゾマツ）と思われる。

その平面計画は、ここで行われた商談、接客、会議そして冠婚葬祭等の全ての用途に叶うようにシンプルな形態としている。基本となる十帖間を一階に三室、二階に三室設け

中の座敷、奥の座敷とし、各部屋及び廊下の仕切りの戸を開閉することにより様々な空間の大きさに対応し変化できるようになっている。一階の土間に面した和室の中央には炉が切つてあったという。さまざまな客がここで主人と語らったのだろう。

また、部屋の広さとバランスを保つため、天井の高さも十尺（約三メートル）とかなり高くなっている。このため仕切り戸を外したときの下がりが壁が重圧とならないように組木欄間を設け、軽さと各部屋の連続感を出している。さらに、それぞれの部屋に床の間、飾り棚を設けている。

昭和十年の写真には煙突が見える。炉は当時普及してきた薪ストーブに取って代わられ、以降の住宅では欄間や高い天井も駆逐されていく。

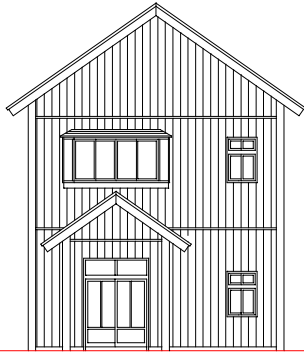
構造的には壁が少ないにもかかわらず大きな変形もない。適度な補修で済んでいるのは、当時の継ぎ手加工の技術の優秀さがあるものと思われる。



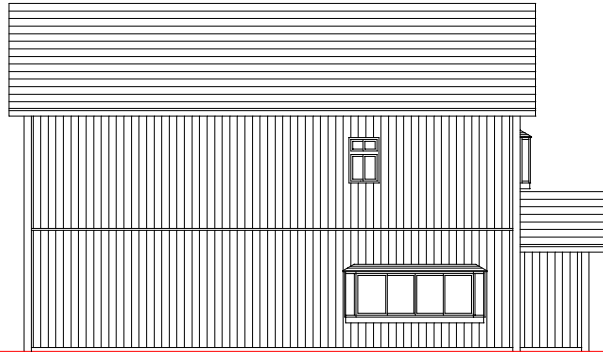
写真-3 2階和室



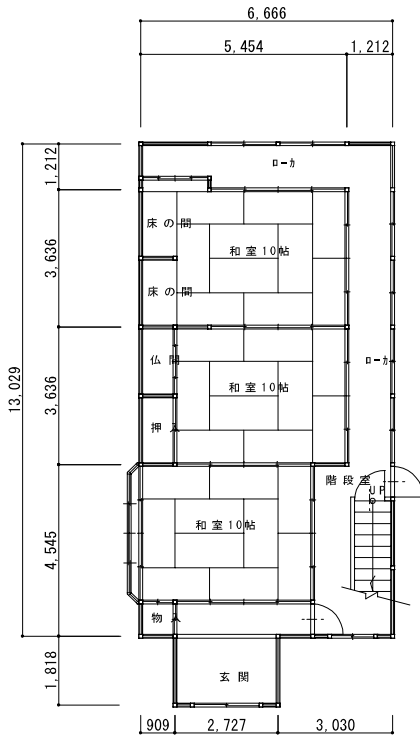
写真-4 2階和室雪見障子



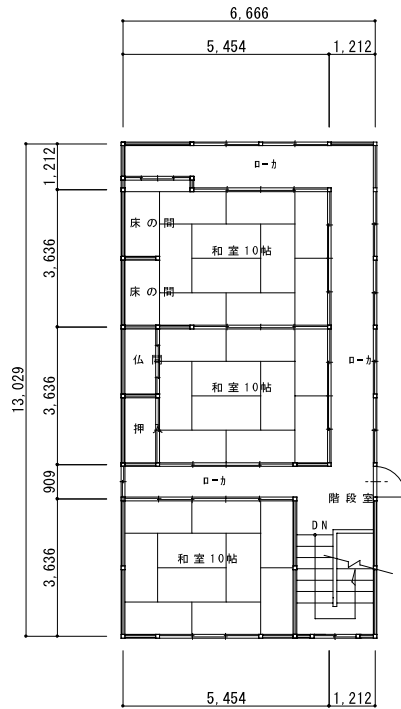
北立面図



東立面図



1階平面図



2階平面図

図-1 山三ふじや本宅(1/100)

区分	一般住宅
種別	一般住宅
建築年	大正14年
位置	本町3丁目6
構造・規模	木造・2階建て
面積	177.89㎡(53.8坪)

三、海軍官舎

・概要

昭和十四年十一月一日、千歳海軍航空隊が開庁した。海軍は航空基地の建設と同時に官舎の建築も進めた。同じ士官官舎でも将官、佐官は一戸建てであり、尉官は二戸長屋であった。戸数の内訳は、甲号（将官）二戸、乙号（佐官）十四戸、丙号（尉官）三十二戸、丁号（尉官）三十四戸であった。開庁から遅れること一か月、十二月一日に現在の春日町二丁目及び三丁目に士官官舎を、真々地に下士官官舎を完成させた。昭和十七年には現在の栄町と青葉に第四十一海軍航空隊の工具宿舎が建てられている。

開庁当時の千歳海軍航空隊幹部の数は八十名ほどと考えられる。士官官舎の完成により、それまで市中の旅館や名士の家に寄宿していた幹部らは全員が真新しい住宅に住むこととなった。

何もなかった土地に突然海軍がやってきて、大量の住宅を一度に建てた。全体の敷地の広さと真新しい住宅群は、当時の町の中で異彩を放った。

・建築考察

(一) 士官官舎：春日町

一団の建物は海軍の建築仕様により行われており、基本の平面構成や各納まりにおいても共通の部分が多くある。これを基本に各階級の部屋数を構成している。一住戸当たりの居室の数が甲号では六室、乙号では五室、丙号では四室、丁号で三室と変化する。

土地はおそらく民地を海軍省が買



写真-5 官舎門柱

収したものであろう。官舎地区には東西に幅十一呎、南北に幅九呎の街区道路を通した。一棟当たりの敷地は将官住宅で約四〇〇坪、佐官用住宅で約三〇〇坪、尉官用住宅は約二三〇坪であり、今時と比べるとかなり広大である。敷地の周囲を高さ約一、八呎の板塀で囲み、出入口部分に高さ二呎位の門柱を設けていた。

建築様式は、屋根は勾配四寸の寄せ棟造りの平拭きトタン張りで、外壁は下見板よるい張り、南面の縁側は雨戸を設けていた。基礎は厚さ十五センチほどの鉄筋コンクリート製の

布基礎であり、一般的に当時の基礎としてはかなり強固な仕様となっている。これは市内にある旧海軍施設に共通している。

全体の形としては「中廊下形住宅」という大正期の中流住宅の典型の一つである。平面的には中央の廊下を挟んで、南側は縁側に接した居室（和室）を配し、北側に台所や風呂を配している。風呂は内風呂で土間に焚き口があった。また、甲号と乙号及び丙号は玄関ホールから入る応接間（洋室）が用意されるといった和洋折衷形であった。

後年、建替えのために士官官舎の取壊しに立ち会った人の話では、天井裏の梁に『秋田〇〇木工所謹製』という印字があったという。また、和室の書院作りの意匠が素晴らしいと、取壊しに当たった大工がその部分をそっくり持ち帰ったとも。おそらく、建築材料、大工とも本州から大量に来たと思われる。



写真-6 乙号官舎内部（玄関から中廊下を見る）



写真一7 春日町の官舎群（昭和27年頃）

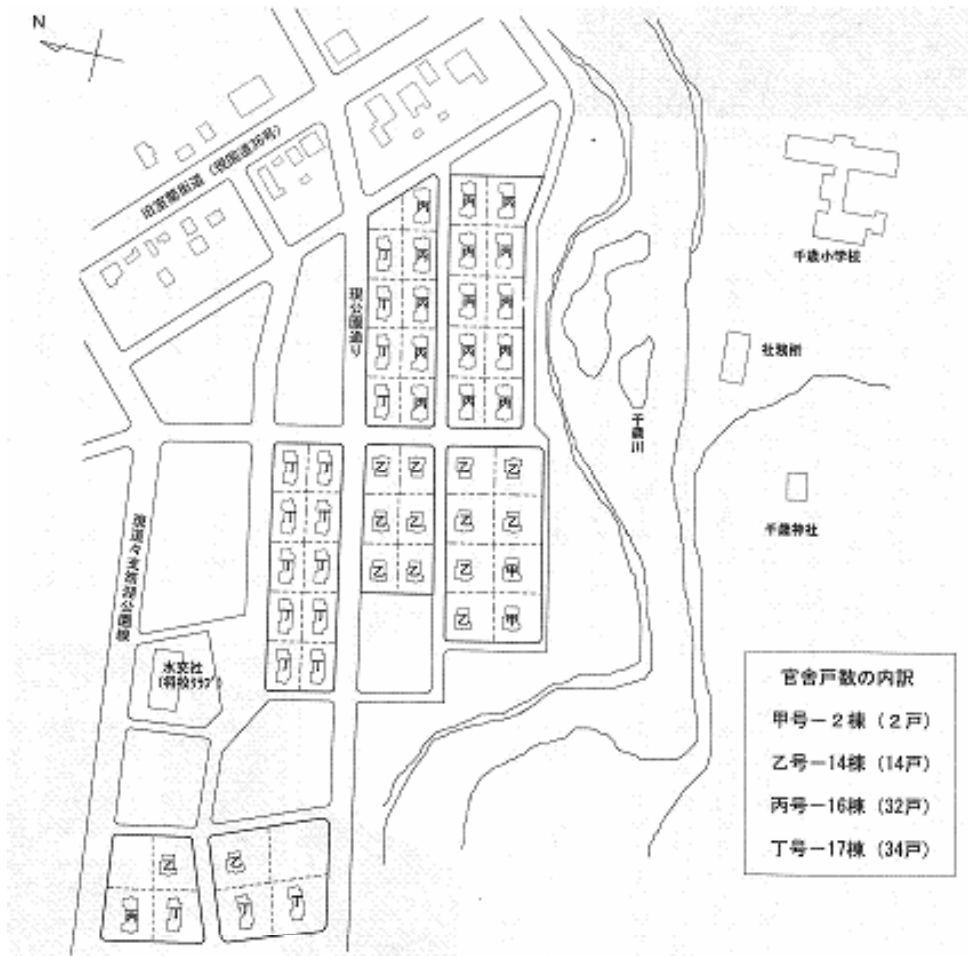


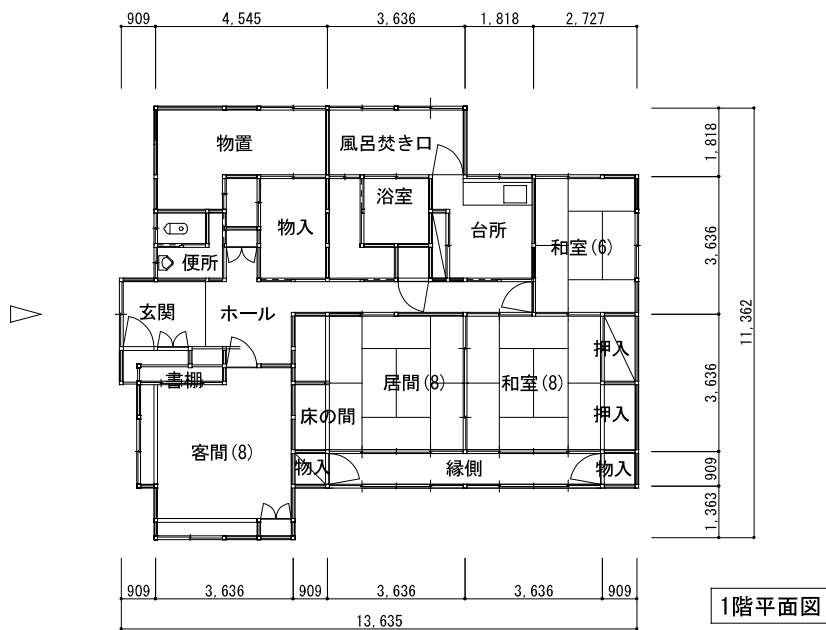
図-2 春日町官舎配置図（昭和14年当時）



東立面図



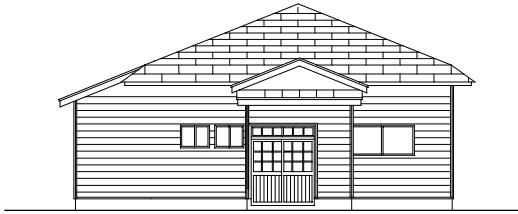
南立面図



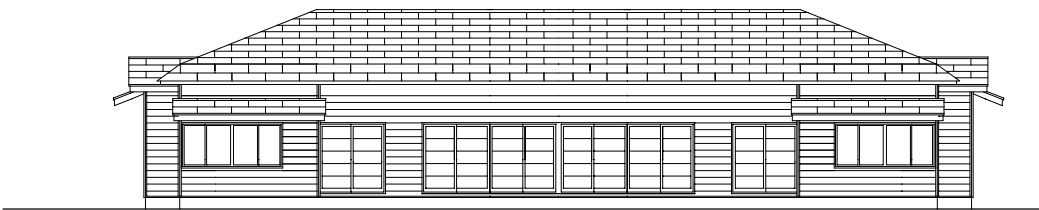
1階平面図

図-3 乙号官舎立面図・平面図(1/100)

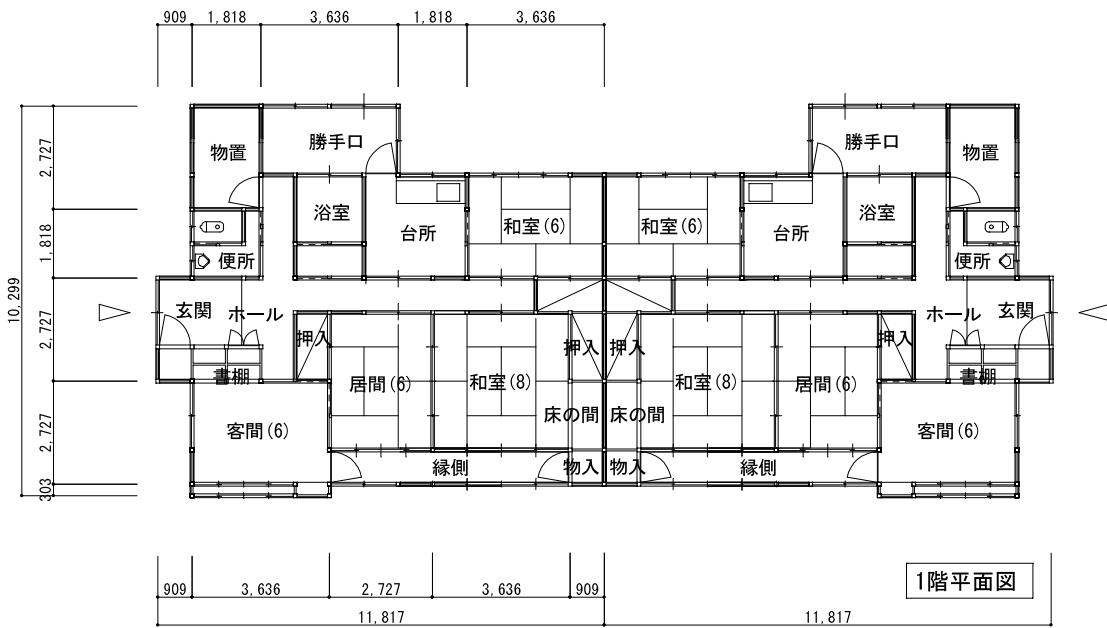
区分	海軍官舎
種別	佐官用(乙号)
建築年	昭和14年
位置	春日町2丁目
構造・規模	木造・平屋建て・1棟1戸
面積	1戸 127.65㎡(38.62坪)



東立面図



南立面図



1階平面図

図-4 丙号官舎立面図・平面図(1/100)

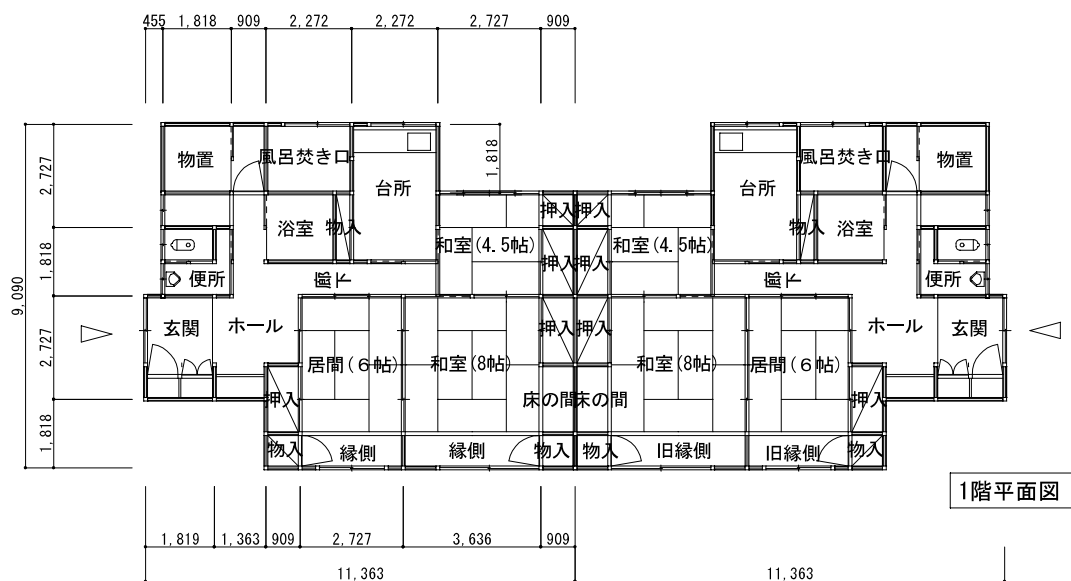
区分	海軍官舎
種別	尉官用(丙号)
建築年	昭和14年
位置	春日町2丁目
構造・規模	木造・平屋建て・1棟2戸
面積	1戸101.65㎡(30.7坪)



東立面図



南立面図



1階平面図

区分	海軍官舎
種別	尉官用 (丁号)
建築年	昭和14年
位置	春日町2丁目
構造・規模	木造・平屋建て・1棟2戸
面積	1戸 88.82㎡(26.87坪)

図-5 丁号官舎立面図・平面図(1/100)

(二) 下士官官舎：真々地

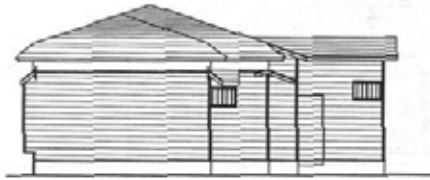
真々地下士官官舎は、青葉公園の南側、旧真々地川の氾濫原であった平地に建てられた。

地名の「ママチ」は、松前藩政時代からシコツ十六場所にその名があるが、語源は不詳とされている。

官舎群は八畳幅と四畳幅の道路で大きな六つの街区に区画されていた。建物の数は一棟二戸建てで五十二棟百四戸であった。一棟当たりの敷地は約一四〇坪であり、周囲を板壁で囲っていたのは春日町官舎と同様であった。

ただし、部屋数は春日町士官用の住戸に対し、居室の数が二室と少なくなっている。今で言う二Kタイプの内風呂付きの平面計画となっている。また、縁側を小さくしたり、廊下も取りやめるなどにより、床面積を押し込んでいる。

外観は、春日町士官官舎とほぼ同様な仕上げであったと思われるが、出窓受けの飾りがないなど、一部に変化がある。



西立面図

区分	海軍官舎
種別	下士官用
建築年	昭和14年
位置	真々地1丁目
構造・規模	木造・平屋建て・1棟2戸
面積	1戸 62.37㎡(19.25坪)



北立面図

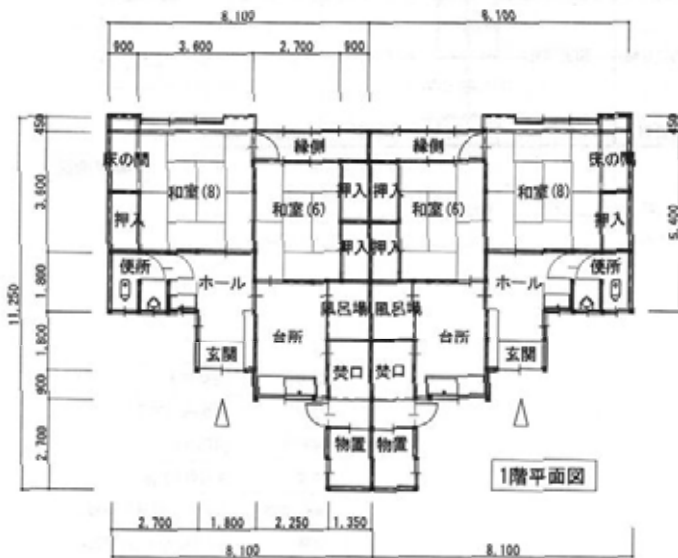


図-6 下士官官舎立面図・平面図 (1/100)

(三) 第四十一海軍航空廠工員宿舎：栄町

栄町の工員宿舎も一棟二戸建て、六十六棟百三十二戸であった。一棟当たりの敷地面積は約一三〇坪である。南北に幅十一坪東西に幅八坪の街区道路によって大きく八街区に分割されていた。部屋数は六帖間が二室の二Kタイプが基本であったが、三室のタイプも四十戸ほどあった。外観では、屋根の形が下士官用以上が寄せ棟なのに比べ、工員用は切り妻屋根となっている。壁は下見板張りで、出窓、縁側がない。

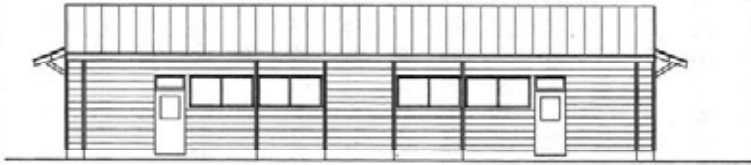
内風呂はなく、住民は敷地内に建てられた共同浴場に通っていた。この共同浴場が使われなくなった時期は不明だが、昭和末年までその脱衣所を熊の置物を彫る作業所として使用していた。

現在まで当時の原型を保っているのは一戸である。その多くは建替えられている。増改築された建物の中に、わずかに名残をとどめるものが数戸あるのみである。

区分	工員宿舎
種別	工員用
建築年	昭和17年
位置	栄町2丁目
構造・規模	木造・平屋建て・1棟2戸
面積	1戸 38.00㎡ (11.50坪)



東立面図



北立面図

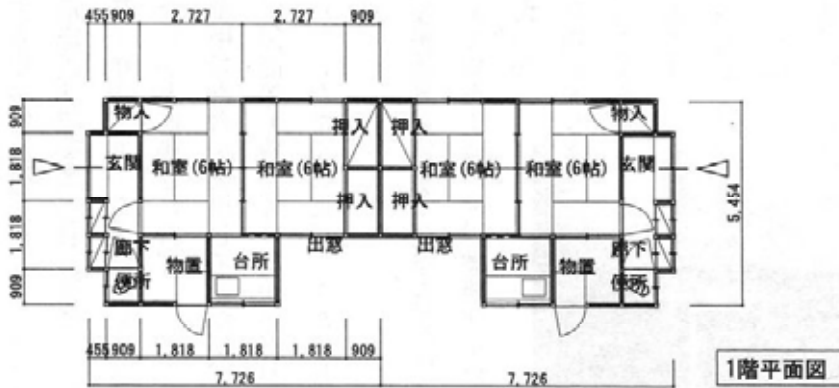


図-7 海軍航空廠工員宿舎立面図・平面図 (1/100)

(四) その他

青葉六丁目から七丁目にかけての一带には工員寄宿舎が三十九棟あった。建築様式は栄町工員宿舎とほぼ同様と思われる。建物面積は一戸当たり約一〇坪であった。当時の姿を伺える建物が今も三、四戸残っている。

東雲町には航空廠女子工員寄宿舎が第一から第三まで三棟あった。第一寮と第二寮は昭和十八年に完成し、第一寮に男子六百した。第一・第

二寮は各二棟建てで雪中廊下（渡り廊下）で結ばれていた。第三寮は家族寮であった。この建物は戦後「清和寮」として駐留軍要員、引揚げ者などへの住宅として使用された。第二清和寮（第一寮）は一時駐留米軍の兵舎として接收されたが、昭和二十二年途中からは臨時の千歳中学校の校舎として校舎新築までの間使用された。

昭和三十四年、家族寮が老朽化のため取り壊され、昭和四十年三月には第一清和寮（第二寮）が火災により全焼した。残った清和寮建物は「不良住宅地区改良事業」の対象となり、昭和四十一年には一棟二十四戸の鉄筋コンクリート造り市営住宅が建設されて現在に至っている。



写真一9 第一清和寮（昭和29年）



写真一8 工員寄宿舎を改修した住宅

(五) 全体

今回は、佐官用（乙号）官舎と尉官用（丁号）官舎の内部調査を行った。特に乙号官舎は、ほぼ建築当初の形態をよく保っていた。

残念ながら将官級官舎である甲号官舎は現存しない。このことについては、千歳海軍基地は大湊海軍施設部建築課の設計監理によるものであるから、航空隊開設時期が千歳の一年後であった美幌町にある甲号官舎は千歳の甲号官舎と同一図面ではないかと推測される。

美幌町では町長公宅として甲号官舎を使用していたが、二、三年前に既に取り壊してしまっていた。図面等も残っていないが、美幌町広報課のご厚意により写真を提供していただくことができた。外見は乙号官舎を一回り大きくした印象である。

乙号官舎に現在も住む新保哲明さんの奥さん清子さんは、「この官舎は戦中は杉浦大佐という方が住んでいたようです。戦後すぐは米兵が住んでいました。昭和二十一年に私たちが住み始めました。建ってから相当経ちますが、柱、梁や基礎もとても頑丈です。建替えようとも考えましたが、そのたびに大工さんから壊すのは惜しいといわれ、一部に手を加えるだけにしています」と話している。

また、冬の暖房については「断熱材などは一切入っていないので、冬はストーブを焚いても全然効きませんでした」と当時を振り返る。



写真一10 旧美幌町長公宅（海軍甲号官舎）

北海道の冬を過ごすためには暖房設備は重要である。しかし千歳の海軍官舎の住宅構造は、本州の蒸し暑い夏の時期を基準とした形態をそのまま引きずっていた。これらの官舎が建てられた当時、既に北海道においては寒地住宅の研究が進んでおり、断熱効果をもたらすオガクズや炭ガラを壁の間に詰めるなどの工夫が一般化されつつあった。にもかかわらず、この官舎にはそのような寒地を考慮した細工はされていない。唯一基礎部分だけが凍結深度を超えるぐらいに頑丈にできている。

その点、同じ北海道でも陸軍は建物の暖房設備に注意を払っていたようだ。日露戦争やシベリア出兵などの経験によるものである。旭川の第七師団では、大正末期から陸軍病院、兵舎、将校官舎にペチカを設備し、一般住宅向けにオンドル式暖房の普及にも力を入れていた。

千歳での海軍は飛行場整備と同時に関連施設の建設も行ったが、昭和十五年になって現春日町二丁目と真々地の官舎群に千歳で初めての上水道を引いた。浄水場は青葉公園の旧真々地川沿いに建築し、春日町地区には水道管を千歳川底に通したのである。自己完結型組織としての軍隊の面目躍如たるものといえよう。

戦後、この官舎に入居した住人はそのしつかりした作りと、なにより蛇口を開けば水が出る水道の恩恵に浴した。

ちなみに、この地区以外の市街地に上水道による給水が始まるのは昭和三十年一月のことであった。



写真一11 旧美幌町長公宅（海軍甲号官舎）

(六) 終戦後の官舎

昭和二十年八月の終戦により海軍は解体し、官舎に住んでいた軍人も郷里等に引き揚げた。十月には連合軍（米軍）約三百名が海軍航空隊基地に進駐し、町長に対し労務提供の要求があった。当時は何ら進駐軍労務関係の機関がなく、町役場において町民の協力一日約百名と元海軍軍人及び航空廠員等から百名の計二百名ほどを提供した。同月十五日終戦処理事務を担当するため終戦連絡札幌事務局千歳出張所が設置され、初代所長に岡本幸信町長が任命された。所長以下十名（役場吏員四名、終戦嘱託六名）にて町役場会議室の一部を使用し、労務の斡旋や賃金の支払い等を開始した。この時、主のいなくなった海軍官舎は進駐軍労務者用住宅として新たな主を迎え入れることとなった。終戦事務局は接収された海軍官舎は家族者の宿舎として、航空廠女子寄宿舎（清和寮）は独身者用として使用することとしたのである。

昭和二十一年十月、改めて千歳町長から札幌財務局長中澤武夫宛に接収された海軍官舎等に関する「国有雑種財産一時使用願」が出された。

これに対し、財務局からは同年十一月二十日付けで次の通り使用認可書が送られてきている。

雑種財産一時使用認可書

住 所 千歳郡千歳町
氏 名 千歳町長 岡本幸信

當局管理の雑種財産別紙條件に依り一時使用認可致します

昭和二十一年十一月二十日

札幌財務局長 中澤武夫

使用 條 件

一、當局管理の左の雜種財産を次項以下の條件に依り使用すること

イ 所 在 千歳郡千歳町

ロ 元用途 千歳陸上航空基地 官宿舎、住宅

第四十一航空廠

ハ 使用数量 一六二棟(三七三戸) 六、一〇一坪七五

名称	棟数	戸	坪数	区分	摘要
士官宿舎	三六	六九	二、一六〇・七五	甲二号 乙二二号一四号 丙一号ヨリ三二号 丁一号ヨリ三四号	甲、乙 一棟一戸建 丙、丁 一〇二〇
下士官宿舎	四五	九〇	一、五五二・五〇	一号ヨリ九〇号 イ一号ヨリ四〇号 ロ一号ヨリ二〇号 ハ一号ヨリ二四号 ニ一号ヨリ八号 ホ一号ヨリ八号 ヘ一号ヨリ六号 ト一号ヨリ三二号	イ、ロ、ハ、ニ、ホ 一棟二戸 建 ヘの三六 ト 一〇四〇 への一二一〇
工員宿舎	六二	一三	一、六二八・五〇		
合 計	一六	三七	六、一〇一・七五	七六〇・〇〇 一号ヨリ七六号	

二、使用目的 戦災者、外地引揚者、進駐軍労働組合員、官公吏其他特に必要と認めらるる者の居住用

三、使用期間 自 昭和二十一年十一月二十日
至 昭和二十二年十一月十九日

四、使用料 別途通牒する

五、運営に関しては特に民生安定産業復興等の趣旨に副ふやう適正公平且つ円に

実施し一般社会政策的運営にも考慮を加ふること

一 速やかに経営方針を定め経営内容を当局に通知すると共におおむね三月

毎に一般使用の状況(居住者調、土地建物の状況、水道、電灯、消防等共

施設に関すること等)を報告すること

(以下省略)

このような国とのやりとりを経て、千歳所在の海軍官舎は当時の住宅不足の緩和のために千歳町長に一括使用認可され、町は引き続き住宅の維持管理を行うこととなった。居住者は家賃を町を通じて国に支払い、管理する町は使用料として国に納入した。

この使用料は官舎の運営に要する経費に充てるものであったが、個人から徴収した金額の四割を町の経費とし六割を札幌財務局に納入するものであった。

昭和二十三年の借戸数は六百九十六戸延べ六、八七六・四二坪で、一か月使用料金は一万九千六百二十三円八十銭であり町に対する運営費は一か月四千円であった。昭和二十一年の使用認可時の三百七十三戸から大幅に増加しているのは、進駐軍労働者の増加に対応する住宅が不足し、急遽の策として家族数に比し部屋数の多い住宅には合意の上二・三世帯を収容することとなったためである。台所、便所もちろん共同使用であった。風呂もあったが、近くの銭湯を利用することが多かった。このような形態

は後年家屋払下げの時の権利調整を複雑にすることとなった。

この官舎の使用期間は一か年であったので、使用期間満了後はその都度継続使用願いを出す必要があった。昭和二十三年三月一日山崎町長から札幌財務局長宛に使用継続願いが出されている。この文書の尚書きには、二十一年の使用認可を受けた棟数の他に当時の状況により使用中の十九棟七四四・八坪（甲号一、乙号十二、下士官六）の建物も併せて認可するようであった。

これらの官舎は昭和四十二年末頃から順次居住者に払下げられていった。前述したような数世帯同居の家屋にあつては、単独世帯となつてからの払下げとなった。財務局に対する支払い方法には一括と十年以上分割の二通りがあった。

官舎が建ち並んでいたこれらの地区は、今では増改築を加えた家や建替えによる真新しい家が混在し一見それとは分からない住宅街となつている。往時にの面影は、部分的に残る特徴ある屋根形状や、何本か残る古い門柱などにより窺うことができる。本格的な戦時体制に入る直前に建てられた軍の施設が、約七十年経つた今も市街地に現存すること自体が珍しいといえる。

四、まとめ

千歳はその発展過程に国の政策が色濃く影響してきた町である。交通の要衝という歴史的、地理的背景は変わることはないが、時代の要請はそれにとどまることを許さなかった。街道筋に小さな商店街を形成していたにすぎなかった千歳は、やがて海軍に依存した町として発展した。

しかしその前段階で、裏街道の寒村を表舞台にひっぱり出そうと陸軍飛行隊誘致に尽力したのが渡部栄蔵を始めとする人たちであった。陸軍飛行隊は結局帯広に設置されたが、千歳の持つ地理的特性から海軍が建設した

航空隊基地により、多くの官舎が建築され都市域の拡大の先鞭をつけた。

全体に貧しい世の中だったとはいえ、彼らは地域における富裕層だった。行動の背景には地域との関わりの中での義務感もあったかもしれない。そうしたことを差し引いたとしても、町の発展を願う意思の強さを感じるのである。

日本の住宅は木造で二十年〜三十年で建替えられていると言われる。

戦後、特に高度成長期は社会の急激な変化に伴い、住宅設備や間取りの陳腐化も速く、短期間での使い捨て状態になった。欧米の住宅の建替え周期が四十五年〜七十年程度で、大事に使用されてきたことと対照的である。そうした中であつて、戦前の木造住宅は躯体が強固なものが多く、手入れさえすれば長期間使用できることは周知の事実でもある。

その後、社会・経済の安定期に入り、個人の価値観を反映した新しい住居スタイルが確立した。設備・構造も多様化し、高付加価値化などその傾向は現在に続いている。

今回調査した住宅は、千歳の町の成立過程に直接関わる建物である。そうでありながら、古の大工の名前が歴史には残らないように、これらの住宅を建てた職人の名前は残ってはいない。いい物を作るといふ意地と誇りが形として残つたのである。

歴史的建築物というときには二つの意味がある。建築史上貴重であるものと、歴史的背景から重要なものである。今回の場合はさしずめ後者の意味合いが強いと思われる。

しかしながら、建築学的な評価としてよりも、地域に堆積した文化・歴史の一断面を表わす地域財産として、その価値は非常に貴重なものといえるのである。

調査にあたって、株式会社山三ふじや柚原武雄、渡部土地開発株式会社市川隆

村不二穂、石塚雅樹、服部賢二の各氏が担当し、建築考察の部分は市役所建設部建築課菊地昭氏の助言をいただいた。

参考文献

- 千歳市 昭和四十四（一九六九）年 『千歳市史』
昭和五十八（一九八三）年 『増補千歳市史』
昭和二十四（一九四九）年～四十八（一九七三）年 『千歳渉外労務管理
事務所業務概況』
遠藤明久 平成 六（一九九四）年 住まい大学体系〇六二『北海道住宅史話
（上・下）』
株式会社山三ふじや創業一〇〇記念社史編集委員会
平成十七（二〇〇五）年『株式会社山三ふじや創業一〇〇年記念社史』

あとがき

ハイビスカスの赤い花が咲いていた。

首里城の守禮門の前には観光客が手に手にカメラを持ち記念写真を撮っている。沖繩戦でアメリカ軍の猛攻がなされたことを想像させるものはない。しかし、首里城の石垣の大部分は復元されたものだった。激しい砲撃がなされた。首里城は、跡形もなく廃墟となった。県民の死者は総人口の三分の一にあたる十五万人におよんだ。沖繩は、第二次世界大戦で日本で唯一戦場となった。

数年ぶりに訪れた沖繩は、海と空が清らかでやさしい。海の色は太陽の光を映し、大陸棚に沿った海は淡いエメナルドブルーだ。東シナ海である。

車で高速道路を走り、北へ向かった。

高速道路沿いには金網の垣根が続いていた。金網越しに広い芝生と建物が見える。人の姿は見えず、もの聞こえず、その中とは雰囲気の異なる別世界だった。嘉手納基地だ。総面積約一九・九五平方キ、四千級滑走路二本を有し、二百機近い軍用機が常駐する極東最大の空軍基地である。

F・15が凄まじい轟音をたてて上昇していった。嘉手納飛行場周辺の住民は、早朝からのエンジン音、「タッチ・アンド・ゴー」訓練などで爆音に悩まされてきた。嘉手納基地には、F・15戦闘機二部隊計四十八機が配備され、航空機の離着陸回数は年間七万回に

のぼる。この訓練の一部を、国は国内五カ所の基地に移す方針である。その候補の一つに千歳飛行場が上げられた。私たちにとって米軍の駐留は、今と違っては昭和史の一部だが、沖繩は今なお戦後が続いている。長く忘れかけていた「米軍駐留時の千歳」にわかに現実のものとなった。

昭和二十六年五月、一か月あまり続いた新兵訓練が明け、一万五千人のオクラホマ州兵の多くが千歳の町に繰り出した。米兵が目当ての女性が全国各地から集まっていた。旧室蘭街道、用水通りはGIたちや客待ちする女性たちで溢れた。

陋巷迷路のような小路には呑屋やパンパンハウスが次々に建てられ、世は奔騰して、にわか普請の慌ながら小都市を造りあげた。

「得意げに口紅を濃くした足の短いパンパンが、ぶら下がるようにして手を組み、街の辻々には獲物を狙う彼女たちがズラリと並ぶ。街には破れかえるアメリカジャズの騒音」があふれた。

また、本人の意思とは裏腹に、体を犠牲にして生きていかなければならない女性もいた。

今となっては、古い紙のように干からびた日々の記憶である。当時がどのようなものであったか口碑を伝える人はすでに稀である。米軍嘉手納基地のF・15の訓練の一部移転計画は、忘却の淵にあった歴史が五十数年の時間を経てにわかに現実の問題として蘇生されたのである。

〈編集子 〇〉

志古津

3号

『新千歳市史』機関誌

平成一八年 三月三十一日発行

発行 千歳市

〒〇六六・八六八六

北海道千歳市東雲町二丁目

編集 千歳市総務部主幹

市史編さん担当

TEL 〇二三・二四 三二三三

内線四〇一

印刷 (株)光健印刷

千歳市栄町一丁目一番地